

JIC インフォメーション

第223号(臨時号) 2023 年 1 月 18 日
年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所: JIC国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<https://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階 TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NSビル 5 階 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌



写真は、本紙記事より抜粋

《講演録》 大阪日口協会講演会

ウクライナ戦争、ゴルバチョフ氏の視座にはどう映っていたか
…副島 英樹(朝日新聞編集委員・元モスクワ支局長)…2P

《連載コラム》 こんな時代にロシア語のすすめ

「絶対においしいロシア料理」…黒田 龍之助…13P

《本の紹介》

「にぎやかなロシア語メモ」(黒田龍之助著、大修館書店)…14P

「タートル語」(櫻間瑞希・菱山湧人著、白水社)…15P

《本の紹介》

「杉原千蔵とスターリン」(石郷岡建著、五月書房新社)…15P

「犬の心」(ブルガーコフ著、石井信介訳、未知谷)

「奪われた革命」(石井信介著、未知谷)…16P

《講演録》 極東ロシアとウクライナ

…藤本和貴夫(大阪大学名誉教授)…18P

《ロシア関係情報》

創価大学ロシア語スピーチコンテスト、など…22P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

ウクライナ戦争

11 月 26 日、大阪日ロ協会はウクライナ戦争をテーマに講演会を行いました。米レーガン政権との核軍縮交渉から東西冷戦終結を導いたゴルバチョフ・元ソ連大統領の目にはこの戦争はどう映っていたのでしょうか。朝日新聞編集委員・元モスクワ支局長の副島英樹氏が、その豊富なロシア取材経験にもとづいて話をされました。

以下、大阪日ロ協会の了解を得て講演録を掲載します。(編集部)

2022 年 11 月 26 日／大阪日ロ協会講演会

講演録

ゴルバチョフ氏の視座にはどう映っていたか

副島 英樹 (朝日新聞編集委員・元モスクワ支局長)

はじめに

私は、1995 年から 96 年にかけて 1 年間、語学留学という形でモスクワに行きました。モスクワ大学のヴェルナツキーという学生寮に住んで、初めてロシアの生活に深く触れる経験をしたのですけれども、この時期がロシアにとってはいわゆる「屈辱の 90 年代」で、国が壊れるというのはいわゆる状態になるんだなというのを実感しました。大学の先生は白タクの運転手をしていたり、警察官は家族を養うために「ネズミ捕り」をしてお金を得たりするしかないという状況で、本当にロシア人にとってこの時代は辛かったのだと思います。プーチン大統領はよく「あの時代に戻りたいのか」と言います。そう言われると、ロシアの人たちは多少の自由を犠牲にしても生活の安定を求めるというメンタリティーが呼び起こされて、それがプーチンの根強い支持につながっているのかなと思います。

ウクライナ戦争によってこのプーチン支持がどう変わっていくのかはまだ分かりませんが、本日は「ウクライナ戦争とゴルバチョフ」というテーマでお話をしたいと思います。

なぜ戦争が始まったのか？

ウクライナ戦争について話をするにあたって、ロシアが今やっていることは当然、国際法的にも人道的にも容認できない暴挙であると思います。その大前提を押さえた上で、けれどもその行為を悪いと責めるだけでは何も解決しない。悪いなら悪いなりに、何故そうなったのかということを考えないと何の教訓も得られないし、今後アジアや他の地域でも同じことが起こる可能性があるわけで、その原因を考えなければだめだと私は常々言っています。

参加者の皆さんは多少ロシアに詳しい方々だと思いますので、今回のウクライナ戦争が突然始まったわけではないということをご存知でしょう。が、日本の大多数の人はこの戦争がいきなり始まってびっくりし、こんな暴挙に出たプーチン

ン大統領は気が狂っているんじゃないかというところまで終わっているのではないかと思います。

私は、1990 年代からずっとロシアを見てきて、これまで 2 回特派員としてモスクワに滞在し通算 8 年いたわけですが、プーチン政権の政治姿勢や外交政策は、初期のころから時を経て変質し、対外環境にも影響されてどんどん変わってきていると思います。その行きつく先が今回の戦争だったと思っています。

「欧米目線」だけではわからない

これはわが朝日新聞社も含めて、今回の戦争は「民主主義対権威主義」の二項対立の図式で単純化した解釈をなされている側面が強いのですけれども、もっと複眼的な視点と思考が必要だと思います。

特に日本での見方は、メディアを含めて基本的にすべてが欧米目線です。私が外報部にいた経験から言うと、最初に入ってくる国際ニュースというのは、とにかくロイター、AP、AFP なんですね。これによって、もう最初の段階で価値判断をしてしまって、後で違う情報が入ってきてもなかなか修正できない。しかしながら、西側目線で見ているということは世界の半分しか見てないということです。残り半分は英語と全く違う言語で成り立っていて、西側とは違った文化、違った世界が厳然としてあるわけです。

今回紹介するゴルバチョフ・元ソ連大統領の 2 冊の本 (2017 年出版の自叙伝および 2018 年出版の回想録) を私が





日本語に翻訳したのも、これほど貴重な内容の本が日本で全然知られていないのは、日本人が国際政治を見ていくうえで正確な判断につながらないと思ったからです。

NATO の東方拡大と西側の「勝利者意識」

ロシアのウクライナ侵攻はなぜ起きたのか。これは当然、1989 年の冷戦終結と 1991 年のソ連崩壊、ここから繋がっている話です。

今回のウクライナ戦争の最大の要因は NATO（北大西洋条約機構）の東方拡大であるということは誰も否定できないと思います。戦争が始まったころ、日本の専門家が NATO の東方拡大は関係ないとさかんに言っていましたが、それは客観的な目で歴史を見てない。NATO 東方拡大の危険については、アメリカの良識的な識者の間でも早くから警告がなされていたわけです。

もう一つ大きな要因は、西側の「冷戦での勝利者意識」です。資料で配布したゴルバチョフ氏の論稿（ペレストロイカと世界 人間の安全保障へ教訓を 21 年 11 月 30 日）は、ちょうど一年前に朝日新聞のオピニオン欄「私の視点」に掲載されたものです。これは当初、ソ連崩壊 30 年に合わせてゴルバチョフさんの考えを聞かせて欲しいと質問を出したところ、A4 用紙で 20 ページものロシア語論稿が送られてきて、それを翻訳してここに収まる字数に要約したものです。内容は簡単に言えば、「冷戦終結というのは東西両諸国の共同作業だったはずだ。なのに冷戦後、西側は自分たちが勝ったと勝利者宣言をして、一方的に世界の一極化を進めた」という西側に対する痛烈な批判です。この点ではゴルバチョフ氏の立ち位置は今のプーチン大統領と一致するわけです。

プーチン大統領とゴルバチョフ氏の考え方は政治的には全く正反対です。ゴルバチョフ氏は最後まで自分は社会民主主義論者であると言っていました。プーチン大統領は、最初は民主主義を評価しているように見えた時期もありましたけれども、時が経つにつれロシアの民主主義体制というもの三権分立も含めてないがしろにし、強権的な政治を推し進めてきたと思います。政治の考え方やスタイルが全く違う二人が一致するのがこの NATO 東方拡大への批判です。



ウクライナ戦争の実相～ブチャの虐殺

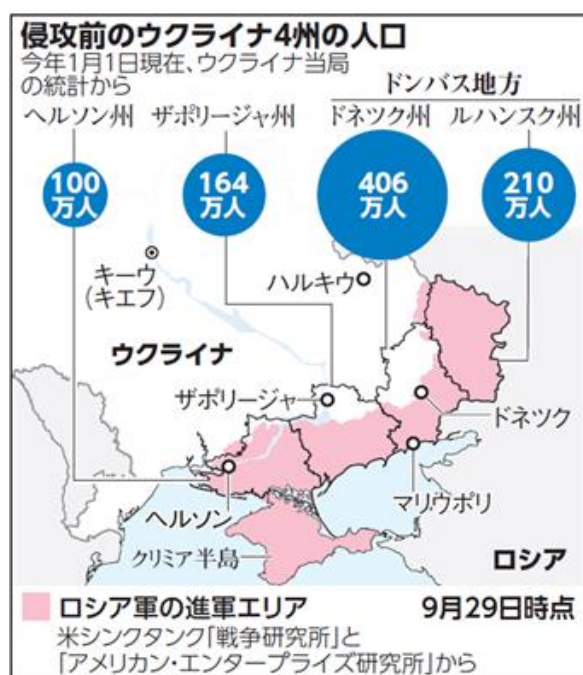
2 月 24 日にロシアが軍事侵攻してウクライナ戦争が始まりました。ロシア軍は東だけではなく、北からも南からも全面的に侵攻しました。図は、侵攻後 1 か月経った 4 月 6 日時点の地図です。この段階では北のキーウ（キエフ）周辺からロシア軍は撤退して、東部と南部に勢力を集中し始めたころです。この時にキーウ近郊のブチャという町でロシア軍による虐殺が問題になりました。



写真はブチャでわが社のカメラマンが 22 年 4 月 8 日に撮ったものです。第二次世界大戦後 75 年以上も経った今、こんな光景を見せられるのかという驚きと共に見た写真ですが、実はこの写真はウクライナ政府が各国のジャーナリスト、メディアを集めてバスに寄せ、ここに連れて行って撮らせたと言われています。この写真が撮られた背景についてはあまり日本のメディアで語られていません。

プーチン大統領による「核の威嚇」

次項の図は 9 月 29 日の段階です。ピンク色の部分がロシア軍の侵攻エリアで、一部ウクライナの支配地域を残していますけれども、この 4 州が翌 9 月 30 日にロシアに併合されました。もちろん国際社会はこの 4 州併合を認めていません。



この時のプーチン大統領の併合演説で、私が印象に残ったというか恐ろしいなと思ったのは、彼が「ヒロシマ」「ナガサキ」という都市名を出してアメリカの原爆投下を批判したくだりです。

プーチンはこう言います。「アメリカは、二度に渡って核兵器を使用した世界で唯一の国だ。日本の広島と長崎の都市を壊滅させた。要するに前例を作ったのだ」。彼が言おうとしたのは、「アメリカは原爆を投下したけれども今もこれを正当化して謝罪をしていない。正しい戦争のために使ったと言うのなら、我々も使ってもいいではないか」ということを言外に言うことで、「もしかして本当に核を使うかも知れない」という懸念を高め、西側に対する圧力にしようとしていると思うのです。

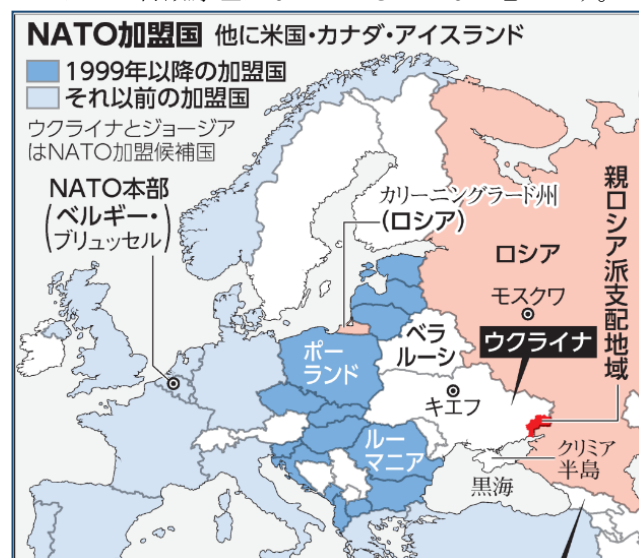
演説の中では、広島・長崎だけではなく、第二次大戦中に米軍の大空襲で壊滅的被害を受けたドレスデンやハンブルグ、ケルンといったドイツの都市についても触れています。これらは広島・長崎の原爆投下を含めていかなる軍事的必要性もなかったのだと。これは、アメリカというのは恐ろしい国である、歯向かうとどうなるか見せつけるためにわざわざやったんだと彼は言ったわけです。

ウクライナの NATO 非加盟を求め続けたロシア

当然、プーチン大統領の頭の中には NATO 東方拡大への危機感がずっとありました。図は現在の NATO 加盟国の状況です。水色の部分がかつての NATO 加盟国です。当初 16 か国だったのが、冷戦終結後、青い部分の旧東側諸国とバルト三国が順次加盟して現在は 30 か国になっています。そうして、スカンジナビア半島の白い部分＝フィンランドとスウェーデンが、今加盟手続きを進めているところです。この 2 か国が加盟するとロシアと NATO が長大な国境線で直接対峙することになります。

峙することになります。

ロシアにとってウクライナがやはり NATO 東方拡大のレッドゾーンだったわけですが、ウクライナはもう事実上 NATO 加盟国のような状態になってしまっています。ロシアとしては欧州安全保障協議でウクライナの NATO 非加盟を文書で確認したいとずっと交渉を試みてきたわけですが、全部はねつけられた。プーチン大統領が NATO あるいはアメリカに対して、ウクライナの NATO 非加盟を文書で求め続けたのは、おそらくゴルバチョフ元ソ連大統領が冷戦終結後の東西ドイツ統一交渉で、NATO 不拡大の念書を取っていなかったことが大きな動機になっていると思います。実際ゴルバチョフ氏の本を読めば、プーチンから「何故 NATO 東方不拡大の文書化をしなかったのか」とよく言われると書いてありますので、ゴルバチョフの轍を踏まないということがプーチンの行動原理になっているのかなと思います。



生かされなかった「警告」

NATO の東方拡大は、実はアメリカでもかねてから危険であるという警告がなされていました。

ソ連封じ込め政策の提唱者と言われるアメリカの外交戦略家であり、評論家・外交官でもあるジョージ・ケナン氏は、1998 年 5 月の段階で「私はそれ (NATO の拡大) は、新たな冷戦の始まりであると思う。ロシア人は強く反発するだろうし、ロシアの政治にも影響を与えるだろう。それは悲劇的な過ちだ」(ニューヨーク・タイムズ紙) と言っていました。この予想は 100%的中しました。

1990 年代のクリントン政権の国防長官でウィリアム・ペリーという人がいました。この人もクリントン政権の中にいた時から NATO 拡大には慎重な立場を取っていました。彼は、2009 年にチェコのプラハで「核兵器なき世界」の提唱を行ったオバマ大統領に影響を与えたアメリカ四賢人の一人です。彼はトランプ政権になってから「核のボタン」という本を書きます。要するに核のボタンを押せるトップリーダーにとんでもない人物が出てきたら世界は危機にさらされるとい

う危機感から書いた本ですが、この翻訳が 2020 年に朝日新聞出版から出ました。その中で彼はこう書いています。「冷戦終結とソ連崩壊は米国にとってまれな機会をもたらした。核兵器の削減だけでなく、ロシアとの関係を敵対からよいものへと転換する機会だ。端的に言うと、我々はそれをつかみ損ねた。30 年後、米ロ関係は史上最悪である」。

アメリカ軍の将校から歴史家に転じたアンドリュー・ベースビッチ氏は、その著書「幻影の時代 いかに米国は冷戦の勝利を乱費したか」で、西側の勝利者意識が世界を不安定にさせたというゴルバチョフ氏の「私の視点」と同様の主張をしています。「ベルリンの壁崩壊を目の当たりにして、米国の政治家や知識人は古来、歴史で繰り返された『勝者の病』というべき傲慢さに陥り、現実を見る目を失ったのです」(2020 年 6 月、朝日新聞のインタビュー記事)。

「クリントン政権がプーチンを生んだ」

プーチン大統領を後継指名したエリツィン大統領は、回想録「大統領のマラソン」(2000 年)で、「私は世界に向けてこう語った。これ(NATO 東方拡大)は誤りだ。新たな東西対立へとおとしめることになるだろうと。残念ながら、その通りになった」と書いている。

先ほど触れたゴルバチョフ氏の「私の視点」も紹介します。「我々は冷戦に終止符を打った。米国の政治家は冷戦での共通の勝利を確認する代わりに、自らの《冷戦での勝利》を表明した。当時、その後の世界の流れを決めることになる失敗や急変が起きた。ここに、新しい世界政治の基盤をぐらつかせた誤りや失敗の根がある。勝利者意識は政治での悪しき助言者であり、モラルを欠くものだ」(朝日新聞 2021 年 11 月 30 日)。

もう一つ紹介しておきます。法政大学名誉教授の下斗米伸夫先生が、この戦争が始まった 2 日後の朝日新聞の読書面に書かれた論考です。「東西和解の合意に抗して、クリントン政権を選んだのは同盟拡大というロシアを凍らせる選択だった。東欧移民票を自らの大統領選挙に利用するという短慮も今日の状況を招いた。ひ弱なロシアの民主化派が退潮すると、エリツィン大統領が後継者に選んだのは元 NATO 担当の情報将校だった。春秋の筆法で言えば、クリントンがプーチン政権を誕生させたのだ」。

エリツィン辞任とプーチン政権の誕生

プーチン政権誕生の経緯は皆さんご存知だと思いますが、2000 年 1 月 1 日の元旦紙面の一面トップを飾ったのがエリツィン大統領の辞任でした。この時私はモスクワ特派員で駐在していたのですが、当時「2000 年問題」というのがありました。1999 年から 2000 年に切り替わるときにコンピュータの不具合が起きて、原発や航空機の運航に何か支障が起きるのではないかとという問題です。ロシアのチュコト半島やカ

ムチャツカは日本の時間帯よりも東にあるので、何か起こるとしたらロシアが一番早いのではないかとされていたので、当時モスクワ支局には 3 人の特派員がいたのですが、この大晦日の日は誰も冬休みを取らずに残っていました。そして 12 月 31 日の正午のテレビにエリツィンが出てきて、辞任演説をして、「期待に応えられず申し訳なかった。後任はもっと若い指導者に託す」と言うわけです。モスクワ時間の正午は日本の午後 6 時です。大晦日の夕方 6 時、ほとんど正月気分のところこのニュースが飛び込んできて、1 面と 2 面の総合面と国際面の 3 つの面の記事を 3 人の記者で 2 時間ぐらいで書き上げて、東京に送りました。

プーチン政権、当初は NATO 加盟も検討

プーチン政権の誕生以降、さまざまなことがロシアと世界で起きるわけですが、私は 1999 年からプーチン大統領の誕生を現地を見て、そして 2012 年に再びプーチンが大統領に復帰した時も私はモスクワにいたのですが、この間ずっとプーチン政権を見てきました。

当初、大統領に就任したころは、彼は NATO への加盟を模索していたのです。2002 年には実際にロシアは NATO に準加盟します。この時の NATO 事務総長はロバートソンという人ですが、ロバートソンとプーチンがかなり緊密な協力をして、ロシアと NATO がよい関係を築いていけるようにやっていた時代です。2010 年にロシアのヤロスラブリで国際政治フォーラムが開かれた時にロバートソンさんの発言を聞いたところ、「プーチンは本気で NATO に加盟しようと模索していた」ということでした。ただ NATO 加盟を希望する国はたくさんあるので、それらの国の審査が終わった後にロシアの審査をしようと言ったらちょっとキレたというふうにも言っていました。おそらくプーチン大統領の立場からすれば、2000 年に就任して以来、西側にはいろいろ裏切られ続けてきたという感覚だったのだと思います。

アメリカの ABM 制限条約からの一方的脱退

例えば 2001 年に 9.11 のアメリカ同時多発テロ事件が起きます。当時のライス米 국무長官の回顧録を読むと、プーチン大統領はこの年の 6 月に「イスラム国際テロ組織の動きが怪しいので注意しろ」という警告をアメリカに出していたというんですね。実際その 3 か月後に同時多発テロが起きて、ロシアもチェチェン問題を抱えていましたから、一緒にテロ対策をやっていこうと当時のブッシュ(Jr.)政権に呼びかけるわけです。

ところがそれに対する返答が 2002 年のアメリカの弾道弾迎撃ミサイル(ABM)制限条約からの一方的な脱退でした。この条約は 1970 年代からアメリカとソ連が核兵器のバランスを維持するための重要な条約でした。核兵器を「矛」とすれば、お互いが「盾」を持たない方が矛を出しにくいので、

攻撃しにくい。お互いミサイル防衛は持たないようにしようと約束した条約でした。これを当時のブッシュ政権は一方的に破棄するわけです。

これは 9.11 を受けてイスラム教国からミサイルを打たれた場合に備えてフリーハンドにしておきたいということだったと思うのですが、米ロの核バランスを大きく崩すことになります。この 16 年後です。プーチン大統領はクレムリンで演説して、極超音速ミサイル「キンジャール」などロシアの最新兵器を披露します。これをロシアが開発するきっかけになったのが ABM 制限条約の破棄だったのです。要するにロシアはアメリカのミサイル防衛を突破する高性能ミサイルの開発をやってきて、それが十数年越しに実現して、このキンジャールというミサイルは実際にウクライナ戦争で使われることになりました。

「西側には裏切られ続けてきた」

2003 年～2004 年には、いわゆる「カラー革命」が、グルジア（03 年バラ革命）やウクライナ（04 年オレンジ革命）で起きます。民衆の抗議活動やデモによって親ロシア政権がひっくり返されて、親欧米の政権ができる。並行して NATO の東方拡大が進む（1999 年ポーランド、チェコ、ハンガリー／2004 年バルト三国、ルーマニア、ブルガリア、スロバキア、スロベニア）。東欧の旧ソ連圏の諸国が次々と NATO に加盟していくわけです。

2007 年、ついにプーチン大統領はミュンヘンでの欧州安全保障会議で演説し、西側への痛烈な批判を行います。これは西側との決別宣言でした。

その翌年 2008 年にはジョージア（グルジア）紛争が起きました。これはアメリカとロシアの代理戦争ですが、このジョージア紛争＝5 日間戦争の 1 か月後に、私は 2 回目のモスクワ赴任となりました。

08 年 9 月から 4 年 7 カ月モスクワにいたわけですが、実は私がいたころは意外に米ロ関係が良かった時期なんですね。米ロ関係がリセットされて、新しい戦略兵器削減条約（新 START）に米ロが署名したりしました（2010 年）。ただその前の第一次プーチン政権の 8 年間は、プーチンが西側 NATO に対する恨みを沸々と積もらせていく時期だったと思うのです。

2014 年クリミア併合で袂を別つ

結局その後、2014 年にマイダン革命・ウクライナ危機が起きて、クリミア半島がロシアに併合されるということになります。クリミア併合でロシアは G8（主要国首脳会議）からはじき出されて G7 になります。ロシアの G8 入りは NATO 東方拡大をロシアがのむことと引き換えだったのですが、この時からロシアは西側と完全に袂を別つことになります。

プーチン大統領はクリミア併合の際に「核兵器を使う用意

はできていた」と発言して世界に衝撃を与えるわけですが、プーチン大統領が「ロシアは最強の核大国の一つだ」とか、そういう核の恫喝を始めるようになったのは、今回のウクライナ戦争ではなくてクリミア併合の時からです。

米ロ関係リセットのメドベージェフ政権

先ほど、私が 2 回目にモスクワに赴任した時（2008 年 9 月～13 年 3 月）は米ロ関係が比較的良好な時期だったと言いました。メドベージェフ大統領とオバマ大統領の間で 2010 年に新戦略兵器削減条約（新 START）が署名されて発効するわけですが、この条約はかつてゴルバチョフ大統領とブッシュ大統領（父）が 1991 年 7 月に締結した戦略兵器削減条約（START）の後継条約です。START は核弾頭の上限を米ソ各 6000 発に抑えるという内容だったのですが、新 START では核弾頭の上限をそれぞれ 1550 発にする条約になりました。



これは 2012 年に取材したのですが、実はロシアと NATO はミサイル防衛を共同でやることまで考えていたんですね。

5 月にロシア国防省が主催してモスクワで NATO 各国の将校を招いて開いた非公開会議があったのですが、一部中に入れてもらって撮った写真がこれです。ミサイルを、どのエリアに飛んできたらロシアが撃ち落とし、どのエリアに飛んで来たら NATO が撃ち落とすか、ということを示した地図です。こんなところまで話が進んでいたというのは今から思えば信じられないですが、こういう状況が終わる時期が来ます。

プーチン再登板

2011 年 9 月 24 日、与党「統一ロシア」の大会で、プーチン氏は翌年の大統領選挙への出馬表明を行います。翌日の朝日新聞朝刊は、これは世界の動向を変える重要ニュースだということで、プーチンの大統領復帰表明を一面トップで報道しました。

当時、プーチンが大統領に復帰するのかもしれないかは国際的な関心ごとになっていました。2012 年はロシアだけでなく中国やフランスなどの主要国で指導者が変わる時期でもありました。プーチンが大統領として復帰すればかなり世界の動向を変えるのではないかとされていました。私もプーチンが復帰するとなったときは内心胸騒ぎがしました。長期政権というのは本当に良くないと思うのですが、彼はかつての恨みを忘れないんですね。おそらく彼は第一次政権の時につ

らせた恨みを晴らすために出てきたのではないかと今にして思います。

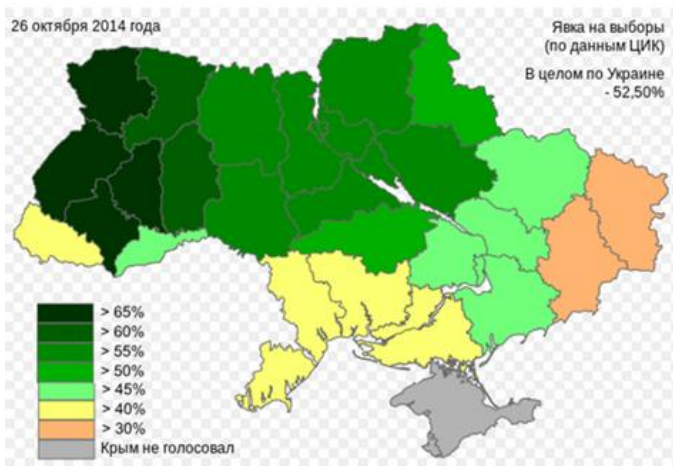


反プーチン運動も起こる

ただし、プーチン復帰はロシア市民の中に大きな反発を呼び起こします。彼が大統領に正式就任して 1 か月後の 2012 年 6 月にも、ロシア各地で大きな反プーチン集会が起きました。写真は、その時モスクワで取材中に撮ったものです。「ミーティング法（集会を取締る法律）はファシズム国家への道だ」というプラカードですが、ここにヒトラーとムッソリーニとスターリン、ベリヤの写真に並んでプーチンが描かれています。ですから、当時のロシア市民はプーチンの復帰を決して喜んでいなかった。とくに大都市では反発をもつ人が多かったのです。せつかく中間層が育ってきた時期だったのですけれども、逆に中間層が育ちつつあったがゆえに反プーチン運動が起きたのだと思います。

東西の違いが大きいウクライナ

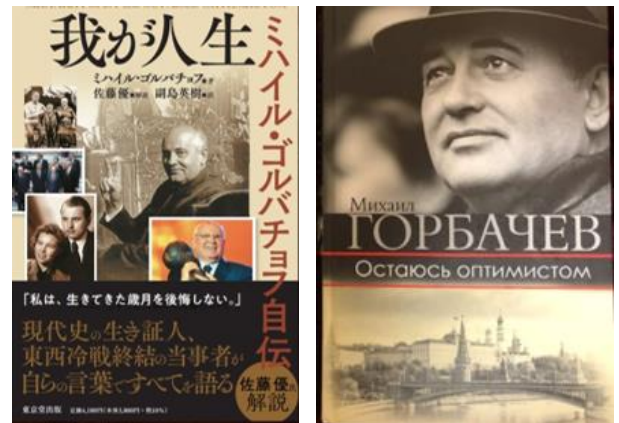
図は 2014 年 10 月のウクライナ国政選挙の投票率地図です。西部の方が圧倒的に投票率が高く、東部ははるかに少ない。これは現政権を認めているかどうかの差が出るわけですが、このようにウクライナという国は地域によって大きく違いがあるわけです。東部はかつてロシア帝国の支配下にあり、北部・西部はポーランド・リトアニア公国やハプスブルク家（オーストリア・ハンガリー帝国）の支配下に置かれていました。



宗教的にも東部はロシア正教ですが、西部はカトリックの色彩が強い。西部は第二次大戦中ナチスドイツと協力してソ連と戦った地域でもありますので、プーチンが主張する「ウクライナの非ナチ化」というはその辺から出てきているわけです。そして、現在、日本のメディアがウクライナのニュースを発信しているのは全部この西部の黒い地域からです。日本の読者や視聴者には西部で集めたウクライナの様子しか伝わらないということになります。

ゴルバチョフ氏のプーチン観

本題のゴルバチョフさんに入ります。私はゴルバチョフ氏の本を 2 冊、日本語に翻訳して出版しました。



1 冊はゴルバチョフ氏の自叙伝、原書は「Остаюсь Оптимистом＝オプティミストのままで」というタイトルの本です。日本語版は「我が人生 ミハイル・ゴルバチョフ自伝」というタイトルで 22 年 7 月末に出版されました。この本が出て 1 か月後にゴルバチョフさんが亡くなってしまいました。

この自叙伝の中で、ゴルバチョフ氏はプーチン氏に対する評価を書いています。私が最初にこの本を手にとったのは、「ゴルバチョフはプーチンをどう見ているのか」という関心からでした。ゴルバチョフ氏は、最初は混乱した国を建て直すという意味で、プーチンの手腕を評価していました。「前任者から危機的状況を引き継いで、新しいロシア大統領は国情を安定させた。ロシア国家を維持し、経済危機から脱するプロセスに着手し、ロシアの国際的地位を強化した」と書いています。

当初は、ゴルバチョフ氏も混乱状態を收拾するためには多少強権的なことをやっても仕方がない、時には「辣腕政治」も必要だとみていた。しかし二期目に入るとちょっと違うぞと思い始めて、「誤算だった」と言う。そして、「このことが我が国を袋小路へと導いた」と批判します。

具体的にどういう点を批判しているのかというと、やはり民主主義の問題です。本来の民主主義の政党政治は、選挙で多数を争い、政党組織を通じて国民が自分達の意思表示をし、政策を決めていくということですが、ロシアの政治はこのよ

うな可能性を事実上封じられる形になったと言っています。議会とか司法制度、市民社会の役割やメディアの独立性、こういった政治権力に対抗する力が決定的に削がれてしまった。これは私もモスクワにいて当然感じたことですが、選挙に出られるのは体制内野党だけで、本当の意味での野党は立候補もできないという状態に実質的になっています。メディアも、エリツィン時代はかなり野放図な無秩序状態だったのですが、それでも報道の自由があったのですけれども、今のロシアのメディア状況は、ノーバヤ・ガゼータという反プーチン政権の新聞に代表されるようなリベラルなメディアはどんどん潰されていくという状況になっています。

「NATO 不拡大」を約束したベーカー発言の真意

もう一冊の本は「Михаил ГОРБАЧЕВ В меняющемся мире=変わりゆく世界の中で」という本です。これは 2017 年にロシアで出版された本ですが、この日本語訳を 2020 年に出版しました。



今回ウクライナ戦争が始まって、NATO の東方拡大が問題になりました。要するにプーチンが「NATO 不拡大の約束があったはずなのに」と言うのに対して、「本当にそんな約束があったのか」ということが議論になりました。そのあたりの事情がこの本に書いてあります。朝日新聞デジタルに記事を書きましたが、NATO 不拡大の議論が出てくるのは、1990 年のゴルバチョフと米ベーカー国務長官との会談記録です。これは東西ドイツの統一を巡る議論の時ですが、ベーカー国務長官が「もし米国が NATO の枠組みでドイツでのプレゼンスを維持するなら、NATO の管轄権もしくは軍事的プレゼンスは 1 インチたりとも東方に拡大しない」という発言をしています。この発言の解釈を巡っていろんな意見が出てくるんですね。

これは、口約束であるけれども NATO を東方拡大しないという約束だったのだというのがおそらくプーチンの主張です。しかし、ゴルバチョフ氏はそれを否定しています。要するにこの当時はまだワルシャワ条約機構が存在していた。ワルシャワ条約機構が存在しているのに NATO の東方拡大が話題になるはずがない。もしそんな話をしたとしたら自分は

ソ連国内でもっと非難されていたろうと言っているんですね。では、このベーカー発言は何かというと、東西ドイツが統一して、それが NATO に入ったときに、NATO の軍勢力は旧東ドイツ領までは拡大しないという意味だというのがゴルバチョフ氏の主張です。

けれども、この発言はソ連に対して NATO が拡大しないと約束したと受け取る人はアメリカにもいて、先ほど紹介したウィリアム・ペリー氏などもそのようなことを本に書いています。

ゴルバチョフ氏の欧米観

ゴルバチョフ氏は欧米諸国との関係をどう見ていたのかということですが、やはり本人は、それまでずっと増え続けてきた核兵器、人類を滅ぼすかも知れない核兵器を史上初めて減少に転じさせる転換点をつくった、実際に核兵器を削減した、そしてそれを東西冷戦終結につなげた、それは実際のところ「米国とソ連をはじめとする東西諸国の共同作業だった」と考えていました。本書を読むと、当時のミッテラン仏大統領とか、西ドイツのゲンシャー外相、あるいはアメリカのシュルツ国務長官、ベーカー国務長官といった人たちとどのような交渉をやったのかということが克明に書かれています。本当に冷戦終結というのは東西の共同作業だったんだということがよく分かります。

ソ連は独ソ戦で 2700 万人もの犠牲を出しています。これは日本 (300 万人) の 9 倍です。ドイツ統一は、戦い殺し合った相手であるドイツ国民の希望を叶えるということです。しかも統一ドイツは NATO に入ることになる。ソ連には好ましく思わない人がいっぱいいるわけです。国内の反発を抑え、国民を納得させる必要があったんだとゴルバチョフ氏は言っています。

にもかかわらず西側が、「冷戦の勝利者」として振舞うことに対して、ゴルバチョフ氏は強い反発を示した。これがプーチンと共通する点ですね。

リベラル紙ノーバヤ・ガゼータ

先ほど触れた反プーチン政権で有名なリベラル紙ノーバヤ・ガゼータのドミトリー・ムラトフ編集長が 2021 年にノーベル平和賞を受賞しました。実はゴルバチョフさんは、この新聞の株主の一人なんですね。ゴルバチョフ氏は、1990 年にノーベル平和賞を受賞したときにその賞金でノーバヤ・ガゼータ紙にコンピューターを 20 台買ってプレゼントしました。

2020 年にゴルバチョフ氏に書面インタビューした時、ノーバヤ・ガゼータについて聞くと、「ノーバヤ・ガゼータは、自分がペレストロイカで進めたグラスノスチ（情報公開）で生れた新聞だ。この新聞はグラスノスチの象徴である」と言っていたのが印象に残っています。



22 年 8 月 30 日にゴルバチョフ氏が亡くなって、モスクワの労働組合会館で葬儀が行われました。スターリンの国葬も労働組合会館で行われたわけですが、ここからノヴォデヴィチ修道院の墓地までゴルバチョフ氏の棺を送る葬儀の先頭に立っていたのがドミトリー・ムラトフさんです。

ウクライナ戦争に対するゴルバチョフ財団の声明

ウクライナ戦争が始まって 2 日後に、ゴルバチョフ財団は一本の声明を出します。

「2 月 24 日に始まったウクライナでのロシアの軍事作戦に関連し、一刻も早い戦闘行為の停止と早急な平和交渉の開始が必要だと我々は表明する。世界には人間の命より大切なものはなく、あるはずもない。相互の尊重と、双方の利益の考慮に基づいた交渉と対話のみが最も深刻な対立や問題を解決できる唯一の方法だ。我々は、交渉のプロセスの再開に向けたあらゆる努力を支持する」(2022 年 2 月 26 日、ゴルバチョフ財団の声明全文)。

この声明を記事にしようと思った時に、「こういう声明をゴルバチョフ財団が出した」という短い記事を出してもおそらく埋没してしまうと思ったので、私は朝日デジタルに『91 歳のゴルバチョフ氏「早急な平和交渉を」ウクライナ危機への視座』という長文の原稿を書きました。この声明を出した時にウクライナ危機の解決の落としどころをゴルバチョフ氏はどう考えていたのかということを含めて書いたのですが、その元になったのが先ほど紹介した 2 冊の本です。

この記事は、大阪社会部のデスクのチェックを受けてネット配信されたのですが、何と 130 万アクセスを集めることになりました。全く予想外のことで、なぜこんなに読まれたのかよくわからないのですが、おそらく「ゴルバチョフさんはまだ生きていたのか?」という反応があつて、やっぱりこの戦争の落としどころは何なのか、その「解」を知りたいという人が多かったのではないかと、当時の社会部長は分析していました。

ミンスク合意の履行とウクライナの中立化

回想録の中でゴルバチョフ氏が言及しているウクライナ危

機の落としどころというのは、まず 2014 年と 2015 年に「ミンスク合意」が 2 回結ばれるわけですが、2015 年 2 月にドイツ・フランスが仲介してロシアとウクライナと一緒に署名した「ミンスク合意 2」、やはりこの履行に尽きるとゴルバチョフ氏は 2017 年の執筆段階で書いています。

さらに、ウクライナ国民にとって必要なのは、「民主的なウクライナであり、ブロックに属さないウクライナであると確信している」と言っている。要するに中立化ですね。ウクライナの中立化は隣のオーストリアをモデルにできると。オーストリアは米ソ冷戦の時代に東西対立の狭間にありました。ヨーロッパ全体が不安定にならないように、オーストリア自身と周囲の国々が中立化を決定しました。だからこそ第二次世界大戦後ヨーロッパで戦争が起きなかったわけです。ですから、今や東西の境目にあるウクライナを中立化することによって、ヨーロッパ全体の危機を回避するということをゴルバチョフ氏は述べていたのです。

核軍縮への転換点を作ったゴルバチョフ氏

ゴルバチョフさんというのは、ロシア問題に詳しい人と話をする、かなり評価が二分される人です。ソ連という単位で見ればそれを壊した人ですし、その後の混乱を招いたということでネガティブな評価をする人が結構います。けれども外交面で見ると、第二次世界大戦後これだけ大量の核兵器と原発を持ってしまった世界において、人類が核兵器を減らす方向に向かう転換点を作ることが出来たのはレーガン・ゴルバチョフの時代、たった一度だけなのです。何故それができたのか? これほど対立していた米ソが核軍縮に向かう協力ができたのは何故なのか? もう一度よく振り返って考えてみるべきだと私は思います。

「核戦争に勝者はなく、決してその戦いはしてはならない」

これは、レーガン大統領とゴルバチョフ書記長が 1985 年の 11 月にジュネーブで初めて会談した時に、合意した言葉です。今年 1 月に核保有 5 か国が共同声明を出しましたが、その中にもこれと全く同じ文言が盛り込まれました。

INF 全廃条約を破棄したアメリカ

レーガン・ゴルバチョフの合意から出発して、結局は冷戦の終結に至るわけですが、この二人の合意を最初に形にしたのが中距離核戦力全廃条約 (INF 全廃条約) でした。1987 年 12 月に米ソが合意して、核戦力を削減し、廃棄していく最初の条約として結ばれました。ところが、この INF 全廃条約が 2019 年に米トランプ政権によって葬り去られるわけです。ですから、弾道弾迎撃ミサイル制限条約 (ABM 制限条約) と INF 全廃条約、この重要な 2 つの核軍縮条約をどちらも破棄したのはアメリカなのです。

INF 全廃条約が破棄されたのは 2019 年の 8 月 2 日です。私はこの時は広島総局長として広島にいて、8 月 6 日の広島

平和宣言を平和記念公園で聞きました。松井・広島市長が読み上げた平和宣言には、レーガン・ゴルバチョフという名前はありませんでしたが、「かつて核軍縮に舵を切ったリーダーたち、先輩たちがいた。その時代をもう一度思い起こさなければならない」という言葉がありました。それで私は、この条約の生みの親であるゴルバチョフさんに会ってこの条約の破棄をどう思うか聞かなければならないと思いました。

核問題に焦点を絞って手紙を出したら、インタビューに応じるという返事が来て、実現したのが 2019 年の 12 月 3 日でした。これは 1989 年に地中海のマルタ島でゴルバチョフとブッシュ（父）が東西冷戦の終結を宣言したちょうど 30 年後に当たる日で、その日にモスクワでインタビューしました。

ゴルバチョフ氏へのインタビュー（19 年 12 月 3 日）

ゴルバチョフ氏のインタビュー記事は、大阪紙面の一面トップで「核戦争は許されない。そこに勝者はない」という見出しで掲載されました（2019 年 12 月 17 日）。さらに、オピニオン面にインタビュー全文を載せて、特設面でなぜ彼に会いに行っただけを書きました。



写真はインタビューの様子です。動画も一緒に撮って、この動画は YouTube で「ゴルバチョフ」と検索してもらえば、5 分間と 8 分間の 2 本の動画が見られます。INF 全廃条約を破棄したトランプ大統領に対してチョールト・パベリー（くそっ！ or 畜生！）とか言ってる場面が映っています。

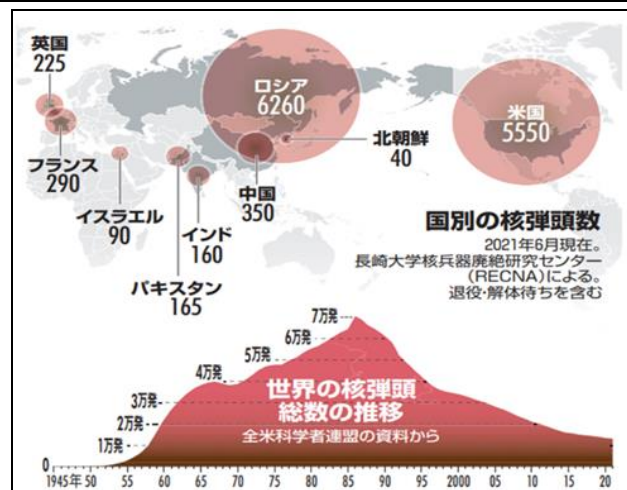
インタビューはその後、「冷戦終結 30 年 ゴルバチョフは今」という記事にして、夕刊とデジタル版に 5 回にわたって連載しました。

原発が攻撃対象になったウクライナ戦争

右上の図表は、世界の核弾頭数の推移です。マックスは 1986 年の 7 万発です。これが減少に転じていく。その転換点を作ったのがレーガン・ゴルバチョフなのです。

今回のウクライナ危機で私が本当に怖いと思ったのは、チェルノブイリ原発が砲撃の対象になったことでした。原発はまさに核兵器と同じです。破壊されたら恐ろしいことになります。南部のザポリージャ原発も同じ状況です。

チェルノブイリ原発は、現在は稼働していませんが、1986



年に事故が起きて 4 号炉が爆発した後も、実は 2000 年まで 3 号炉はずっと稼働していたのです。ウクライナが西側から援助を受けるためには、ロシアと同型の原発を稼働させ続けることに EU 側の反発があって、全部閉鎖することになりました。事故当時、「石棺」と言われてコンクリートに固められていた所から再び放射能が漏れるようになってきたため、欧州や日本も一部資金援助して、大きなシェルターを作り、破損した原子炉から出る放射線を遮断しています。



チェルノブイリ事故がゴルバチョフ氏の背中を押した

実は、チェルノブイリ原発事故がゴルバチョフの核軍縮への背中を押してるんですね。

原発事故が起きた半月後です。ゴルバチョフ氏はテレビ演説をして、レーガン大統領にもう一度首脳会談をやろう、中間的な会談でもいいからやろうと呼びかけます。会談の場所として、ヨーロッパのどこかあるいは広島でやろうと提案しました。核被害というものに対して、彼がいかに深刻な危機感を持ったのかがよくわかります。

これは後のインタビューで述べていたことですが、たった一基の原子炉の制御を失っただけでどれだけ大変だったかと。ましてや戦争になって今の時代に核兵器が使われたら、広島・長崎のように一発ずつ使われることはあり得ない。制御できない状態で核兵器が使われる。一度に何百発も使われるととても地球はもたない。ゴルバチョフさんをそういう判断に導いたのがチェルノブイリ原発事故なのです。

新思考外交＝思考の非軍事化

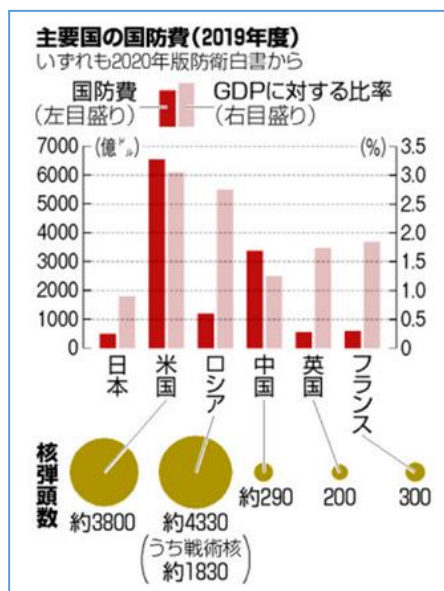
30 年前に冷戦終結を可能にした「新思考」を国際政治の場

にカムバックさせなければならないと思います。

ゴルバチョフ氏が推し進めた「新思考外交」の考え方は、思考の非軍事化です。対立ではなく協調と対話、敵か味方かではなく相互利益こそを大事にしなければならない。核兵器もコロナも人類への脅威であって、人類にとって安全保障は不可分です。人類生存のための共通の利益と責任を認識することで、対立から協調への移行が可能になる。人類共通の普遍的価値にしたがって世界を形成しなければならない、とゴルバチョフ氏は言っています。

ロシアを等身大で見る必要

前回、大阪日ロ協会で講演された朝妻幸雄さんが、「ロシアという国を等身大に見ていく必要がある」ということで、世界経済（GDP 比率）で見たロシアとか、BRICS（新興 5 か国）として見た GDP 比率や人口比率などを分かりやすく話されていましたが、ロシアを特定のフィルターをかけずにいろいろな指標で見えていくことが大事であるというのは、私も全く同感でした。



軍事費についても同じことが言えます。ウクライナ戦争で、ロシアというのは本当に恐ろしい国だと多くの人が思ったわけですが、軍事費の規模で言うとロシアはアメリカに遠く及ばない。通常戦力で比較すると NATO に圧倒的に負けるわけですね。だからこそロ

シアは核兵器に頼らざるを得ないという状況になっています。アメリカと肩を並べられるのは核兵器の数だけなのです。

ロシアの軍事・核問題の専門家であるアルバートフさんにインタビューした時に同じこと言っていました。要するにロシアの安全保障はアメリカに劣らない核を持つこと、それが安全保障になってしまったと。

本気で世界の核軍縮を進めるためには、ロシアや中国と対話しないでやることはできません。ロシアを排除するばかりでなく、対話と協調で軍備管理をしながら、核軍縮を進めるための信頼を築いていかないと核兵器が減ることはない。そのためには、レーガン・ゴルバチョフの時代と同じように、国のリーダーが明確な意思と覚悟を持たないと、これは実現できないと思います。

「文明の衝突」を回避するための知恵こそ必要

冷戦終結後、2冊の本がベストセラーになりました。1つは「文明の衝突」(1998年、サミュエル・ハンチントン著)です。要するに、世界は8つの文明圏(中華、日本、インド、イスラム、西欧、ロシア正教会、ラテンアメリカ、アフリカ)にグルーピングできる。冷戦後の世界で重要なのは、イデオロギーや政治ではなく、文化である。それぞれの宗教や言語、歴史、価値観、習慣といったものがアイデンティティになる。だからこそ、世界の安全を守るためには多文化性を認めてお互いの共存条件を探っていくしかないと言っています。

もう1冊は「歴史の終わり」(1992年、フランシス・フクヤマ著)。アメリカの学者ですが、要するに「歴史上続いてきたイデオロギー闘争が、自由民主主義の勝利によって終わる」「民主主義の際限ない拡大と西側の価値観こそが普遍的である」という内容だったのですが、これはフランシス・フクヤマ氏自身も認めているように、そうはならなかったわけですね。

世界は文明の衝突の方に動いている。だからこそ衝突回避のために各国指導者は知恵を絞らなければならないと思います。

ゴルバチョフ氏の視点が教えてくれるもの

私は、冷戦終結とソ連崩壊から30年以上たった今、なぜ今回の事態が防げなかったのか、それを冷静に振り返り、見つめ直す必要があると思います。目をそらしてはならないのは、「冷戦の勝者」を自認する西側が冷戦終結後の対ロシア戦略を誤り、東西をカバーする安全保障の国際管理に失敗したという現実です。

ウクライナ危機は、冷戦終結と統一ドイツの NATO 加盟の後、米欧がとってきた対ロシア政策と密接に関係しています。東西冷戦が終結したのに、なぜ西側の軍事ブロック NATO だけがその後も残ったのか。統一ドイツの NATO 加盟は「東西の共同作業」だったはずなのに、なぜアメリカは「冷戦の勝者」として一極支配を進め、国際秩序を主導するのか。ロシア側から見れば NATO も EU もロシアを排除する「壁」にしか見えません。軍事機構の存続は仮想敵を必要とし、緊張を高めるばかりです。

そして、いったん戦争が始まってしまうと、「死ぬか生きるか」の論理が優先し、市民の大切な命が巻き込まれていきます。これだけ大量の核兵器を持ってしまった時代に、戦争を起こさせないことこそ重要なのだと思います。そのためにはお互いの共存条件を、対話と協調の外交を通じて模索していくことが必要だと思いますし、ゴルバチョフさんもそのように考えていたのだと思います。

* * *

最後に、ゴルバチョフさんは8月30日に亡くなりました。

ゴルバチョフさんの功罪というのは当然あると思いますけれども、やはり彼は核兵器、原発も含めて核というものの恐ろしさをよく知っていた人物だったと思います。

繰り返しますが、この世界から核兵器を減らす転換点になったのが、レーガン・ゴルバチョフの合意です。実は、二人はそもそもの最初に核兵器全廃を決めていたのです。核兵器を全部無くすことを決めていた。当然、二人の交渉を妨害する人たちもたくさんいます。アメリカの軍産複合体とか、いわゆるマッカーシズム的な反共思想の持主たちとか、現在のアメリカのネオコン勢力に繋がる勢力が数多くいます。バイデン政権の中枢にもネオコンの人たちがいますので、ウクライナ戦争では事実上ウクライナを人身御供にして戦わせ続ける、停戦交渉に応じさせようとしないう勢力がいるわけです。

こういう点を見ると、やはり核兵器というものの問題の大きさというか、むしろ逆に核兵器を減らすあるいは無くすという、人類にとっての最重要問題を通せば、各国の対話や協力が進むのではないかとも思います。そういう考え方をしっかり書き残してくれたのがゴルバチョフさんであるという気がしています。

<質疑応答>

—— 今のウクライナの事態を、一刻も早く停戦・和平協議に向けていくためのカギは、何だと見ておられますか？

副島: 停戦のカギはアメリカとロシアにあると思うのですが、先の予測は非常に難しいですね。

先日、ポーランドにミサイルが落ちた事件がありました。あの時の反応を見ていると、ちょっとムードが変わってきた面もあります。あれは当初 AP 通信の記者が「ロシアの撃ったミサイルがポーランドに落ちた」と報じて、AP 通信は記者を処分しました。匿名の情報提供者の記事を載せる場合は社内の編集トップに報告して了解を得なければならないという規則に反していたのが理由ですけれども、要するにあれは CIA の情報なんですね。おそらくアメリカも早期に戦争を止めさせようとする勢力と、戦争を継続させることで利益を得ようとする勢力とのせめぎ合いだと思うのです。戦争が継続することによって、兵器は売れるし、天然ガスのシェアも取れるわけですから、アメリカは結果的に潤っている。戦争で美味しい目ができる勢力がたくさんいます。それが最近では、「いつまでやってるんだ。国内ではエネルギー高とインフレで大変なのに、価値観よりも庶民の生活の方が大事だろう」という声が高まってきていると思います。

西側の支援疲れもあります。イタリアなどでは「ゼレンスキー早く降伏しろ」というような声がメディアで流れたり、かなり反発が上っています。

ただ、ウクライナの政権はゼレンスキーが全てを決めているわけではなく、やはりアゾフ大隊や強硬な右派民族主義者たちにつながる勢力の意向も無視できないわけです。ゼレン

スキー大統領はもともと和平追求派だったのが最終的には強硬派に変わるわけですが、彼のバックについているのがバイデンの息子で、対外発信する時の服装から映像の出し方などすべての演出をアメリカの広告会社がやっていると言われていいます。戦争というのは基本的にプロパガンダ合戦ですから、ユーゴ危機の時にミロシェヴィッチ大統領が一方的に悪人にされたのも、戦争請負会社のプロパガンダ戦に敗れた結果だと言われています。今回の戦争でもやはり同じことが行われていると思います。

これから冬場に入りますが、ロシアは今、核兵器を使わない代わりにインフラ攻撃を徹底的にやっています。耐えきれずにウクライナから国外に脱出する人も増えている。この戦争の継続に西側がどれくらい耐えられるか、ウクライナ国民がどれくらい耐えられるか、その状況次第かなと思います。

一方、ロシアが停戦に動くとするれば、当然、面子が立つ条件が必要です。しかし、ロシアにとって都合のよい条件では、今度はウクライナ側が受け付けません。ウクライナとロシアの双方を説得できる条件がどういう形でできるのか、現時点では難しい問題です。

ウクライナ戦争の陰で私が気になっていることは、この戦争が起こったのはドイツのメルケル首相が辞めて 2 か月後なんですね。ミンスク合意をまとめる作業は全部彼女を中心にやっていました。アンゲラ・メルケルの評伝が日本でも出ていますが、それを読むと、要するにプーチンと話ができたのはメルケルだけなのです。メルケルは東ドイツ出身の物理学者ですが、ベルリンを訪問したゴルバチョフの演説を聞いて政治家を志す。彼女はロシア語もできますから、プーチンとはロシア語で話しあう仲だと言われていて、おそらく込み入ったことまで全部話していたと思うのです。ところが、彼女がいなくなって誰もプーチンと話ができなくなった。

本当に戦争というのは予測が難しいと思います。結局、戦争は人間の心から起きるんですね。だからやっぱりトップの人達の関係や交渉が重要なのだと思います。

講師紹介：副島英樹（そえじま・ひでき）氏

朝日新聞社編集委員・広島総局／元モスクワ支局長／1986 年 4 月朝日新聞社入社。広島支局、大阪社会部などを経て、1999 年 4 月～2001 年 8 月モスクワ特派員、2008 年 9 月～2013 年 3 月モスクワ支局長を務め、エリツィン、プーチン、メドベージェフの各政権を取材。米ロ核軍縮交渉も担当した。核と人類取材センター事務局長、広島総局長などを歴任。2019 年 12 月にゴルバチョフ元ソ連大統領と単独会見した。訳書に「ミハイル・ゴルバチョフ 変わりゆく世界の中で」（朝日新聞出版）、「我が人生 ミハイル・ゴルバチョフ自伝」（東京堂出版）、新著に「ウクライナ戦争は問いかける NATO 東方拡大・核・広島」（朝日新聞出版）、共著に「ヒロシマに來た大統領『核の現実』とオバマの理想」（筑摩書房）など。

こんな時代にロシア語のすすめ 第2回

「絶対においしいロシア料理」

黒田 龍之助

ロシア料理はおいしい。今回は食べ物のお話です。

食の好みは人それぞれですから、もちろん強制はしません。ただ、わたしはロシア料理が大好きなのです。

不思議なことに、日本のロシア料理店は高級なレストランばかりで、これはちょっと困ってしまいます。ロシア語を履修している学生は「先生、こんどロシア料理を食べに連れて行ってくださいよ!」と気軽にいうのですが、お財布と事前によく相談しておかなければ、おいそれとは行けません。大好きだけど、頻繁に食べに行っているわけではないのです。

外食する代わりに、家でロシア料理を食べます。ボルシチは自分で作れます。作り方はとても簡単で、スライスしたビーツ（缶詰で充分）を細切りにして、牛肉か豚肉とキャベツなどといっしょに煮込み、あとは塩を少々加えれば、それだけでおいしくなるのです。そういえば東日本大震災が起きた日もわが家はボルシチで、ガスが止まってしまった状況下、オーブンレンジでなんとか温めて食べました。温かいボルシチが、不安な気持ちを少しだけ和らげてくれたことを覚えています。

ただしそれ以上は作れないので、外に買いに行きます。先日東京・銀座にあるロシア食料品店でピロシキを買いました。「中身は何ですか?」С какой начинкой? (スカコーイ・ナチーンカイ) という表現を覚えておくと便利です。今回の中身は挽肉とキャベツでした。

広尾にあるスーパーマーケットには、デリカテッセンのコーナーにロシア料理があります。しかもボルシチやピロシキだけではなく、ハチャプリというチーズパンや、「毛皮を着たニシン」というサラダもあるのです。ただしお値段が少々高いので、誕生日などに奮発して買うことにしています。それでも外食よりはだいぶお得です。

不思議なことに、このスーパーマーケットのロシア料理には、容器にモルドバの旗がついています。日本在住のモルドバ人が作ったのか、あるいはモルドバからの輸入品なのか。詳細は分かりませんが、となりますとこれはモルドバ料理でしょうか。う〜ん、旧ソ連地域の食文化はきっちり線引きして区別するのが難しい気がします。そういえばハチャプリはグルジアです。判断には迷いますが、とにかく美味しいこと

は変わりありません。

わたしはJICのロシア語通訳として大学生から大学院生時代に何度も現地に渡ったのですが、最初のころはまだソビエト連邦でした。当然ながらロシア以外の諸共和国に足を運ぶこともありました。といいますか、わたしは多民族国家のソビエト連邦に興味があり、ウクライナ語やリトアニア語に惹かれていたのです。だからそういう地域に行く仕事は、積極的に引き受けました。おかげでいろんな経験をして、さらにはいろんな料理を食べたのですが、それぞれの地域の特徴はあるものの、旧ソ連内の料理は何か共通するものを感じていました。



東京の高級食料品店で買える「ロシア」料理

何より大切なのは、どこで何を食べても美味しかったことです。

実をいえば、わたしにも好き嫌いが少なからずあります。パイナップルは子どもの頃に沖縄で食べ過ぎてからダメになりました。ラッキョウも苦手です。ほかにもイカとピーマンの炒め物とか、サツマイモとか、ピザパイとか、ソーセージとか、できれば敬して遠ざけたい食べ物はいろいろあります。

ところがロシアに行けば、嫌いなものが何もありません。何を食べても美味しく、さらには何を飲んでも愉快で、本当に幸せです。いつでも残さず、全部いただきます。

いや、違いました。一度だけ「お残し」をしたことがあります。

JIC のお仕事で、ある夏にピオネールキャンプで通訳をしていたことがありました。日本人の子どもたちを連れて、ソ連の子どもたちと交流させるプログラムです。キャンプといいますが、別にテントを張って生活するわけではありません。きちんとした宿泊施設があって、他にもレクリエーション室や医務室などが完備しています。食事については調理師さんたちが作ってくれ、わたしたちはそれを食堂でいただきます。実をいえば、日本人の子どもの中には、とくに女の子でロシア料理が口に合わないという子もいたのですが、わたしは何でもおいしくいただいていました。

あるとき、ピオネールキャンプでいっしょに通訳をしていた、日本語専攻の極東大学生サーシャくんから、こんなことをいわれました。

「なんか、調理室のお姉さんが君に会いたいらしいよ」

はて、一体誰でしょう。キャンプ内ではいろいろな知り合いができ、かなり顔が広がってはいましたが、調理師さんとはさすがに接点がなく、相手が誰かも想像つきません。

あるお昼休み、わたしはその調理師さんと引き合わされました。彼女はいかにもロシア人らしい娘さんで、色が白くて頬が赤く、そして思い切りふっくらとしていました。メーテルリンク『青い鳥』に出てくるパンの精のようでした。そしてその手には、一抱えもある大きなパン。しかもハート形！

「ぜひ食べていただきたいくって」

何でそんなプレゼントをくれるのか、不思議に思ったのですが、何故か聞いてはいけなような気がしました。今はニコニコしていますが、怒らせたら絶対に敵わないだろうと、変なことを考えました。当時のわたしは華奢な男の子だったのです。だから何も気づかないふりをして、深々とお礼をいい、あとはさっさと自分の部屋へ引き上げました。

そこで待っていたのが、通訳のサーシャくん。ニヤニヤ笑いながら、これだけのプレゼントをもらったら、それなりに応えなきゃねと、意味深なウインクをしてみせます。一方わたしは、この巨大なパンをどうにかしなければと、そちらの方が気になっていました。

一切れちぎって口に入れます。ちょっと甘みが強いけど、味は悪くありません。だけど全部はとてもしゃないが食べきれない。どうしましょうか。

そこでこのキャンプに参加している日本人の子どもたちにお裾分けすることを思いつきました。ロシア料理が苦手な子がいる一方で、とくに男の子たちはいつでもお腹を空かせていましたから、おやつ代わりに食べてくれることを期待したわけです。

ところが食べてくれません。男の子たちもニヤニヤして、いや、いりませんよ、それは黒田さんが一人で食べたほうがいいんじゃないですかと、みんな手を出さないのです。

すべてはハート形のせいでした。

わたしは懸命に食べるのですが、2日も3日もかけて頑張っているのに、パンはちっともなくなりません。わたしの見ていないところで膨らんでいるのではないかと疑りたくなるほど、パンは一向に減らないのです。結局、ピオネールキャンプ最終日までかけても食べきれず、残りは部屋に残して帰ることになりました。

わたしがロシア料理を残したのは、後にも先にもこれだけです。このことを思い出すたびに、あのハート形のパンと、それを作ってくれた調理師さんに申し訳なく思ってしまうす。

本の紹介

「にぎやかなロシア語メモ あるいは眠られぬ夜の外国語のために」

黒田龍之助著／大修館書店／定価 2400 円＋税



外国語の先生というのはただでさえ多忙であるのに、その傍らで何冊も本を出すような人は超人だと思う。私の慕っている先生方にはこういう人が何人もいて、参考書を書かれた方も、辞書を書かれた方もある。みんな、身体がいくつあるのかと思う。黒田龍之助先生もそういう超人の一人で、確か私は去年も 2 冊のご著書の書評を書いたはずなのだが、た

った 1 年でまた新しい本を出された。

いま新しい本といったが、これは単に「新刊」という意味のほかに「これまでにない本」という意味でもある。本書『にぎやかなロシア語メモ あるいは眠られぬ夜の外国語のために』は、まさしく両方の意味で「新しい本」だ。

第一に、この本はロシア語の単語集である。だからロシア語の学習者が読者として想定されている。また一方で、この本は、誰でも読めるエッセイでもある。ロシア語を勉強するつもりがまったくない人でも、ちゃんと最後まで楽しく読める一個の読み物として成立しているのだ。だから「まえがき」も「あとがき」も特殊な構成になっていて、エッセイ用と単語集用に 2 種類ずつ用意されている。そういう、これまでにない変わった本だ。

まず単語集としての評価をしよう。掲載されているのは選りすぐりの必修単語ばかりだ。中級以上のロシア語学習者ならきつと全部知っているはず。逆に、何年もロシア語を勉強している人で、この本にひとつでも知らない単語があったら、最優先で覚えた方がいい。

そんな重要な単語ばかりなのだけど、実は単語集としての使い勝手はよくない。多色刷りではないし、類義語情報もない。著者が自ら(単語集としての)まえがきに書いていることだが、あえて不親切なつくりにしてあるのだ。これは一見、単語帳としての機能放棄のようで、むしろ学習効果にはプラスに働いていると思う。気になった単語は結局、別の参考書や辞書で調べなおさなければならず、これが見事に、記憶に爪痕を残す。

また、本書のエッセイとしての側面も、単語を記憶するプロセスに相乗効果をもたらしている。エッセイとしての本書は本当に読みやすい。いつもの黒田先生の軽妙な文体、いわば「黒田節」で、ミハイル王子やアンナおばさんなど個性豊かな登場人物

が生き生きと活躍する。その内容の 3 割くらいは著者の個人的な愚痴やぼやきだったりするのだけど、おかげでいくら読んでもまったく勉強しているような気にならない。でも、どの文章にもどこかしら引っかかるころがあって、不思議と咀嚼し、反芻してしまうのだ。そうしていつのまにか、全部の単語が頭にこびりついている。

単語集とエッセイを両立させるという試みの副産物として、これまで出版された黒田先生のエッセイ本と決定的に異なる部分が生まれた。すべて横書きで組版してあるのだ。これは単語集としては当然の様式だが、エッセイとしては大きな改革ではないか。

長年の読者はご存じの通り、黒田先生の文章にはたくさんの外国語が出てくる。そのほとんどは横書きなので、縦書きの日本語とは相性がいい。従来、黒田先生のエッセイ本は縦書きで、何行か進むごとに 90 度回転させたり、戻したりして読むことが常だった。

本書はこの小さなストレスから解放されていて、それだけで読みやすさが 10 倍になっている(個人の感想)。正直、こんなに快適だとは思わなかった。黒田先生、これからはエッセイもぜひ、横書きで書いてください。

この 1 年足らずの間に、急激に需要が増した外国語といえば、ロシア語とウクライナ語だ。外国語学習アプリ Duolingo の統計によると、ウクライナ語学習者は世界の様々な国で 17~18 倍に激増したとか。しかしロシア語については、特需とはいっても、今は危険な敵国としてのロシアを分析するとか、ポジティブでない目的になりがちなので、新たな学習者は激増しているわけではなさそうだ。

普段ロシア語に縁がない人は、この本のタイトルをみても、きっと手に取らない。今のロシアの印象が最悪だということを差し引いても、そもそもロシア語という時点で、とっつきにくい、読者を選ぶコンテンツだと判断されてしまうだろうから。でもそれはものすごく、もったいないことだ。もしこの書評が、そういう人を一人でも、本書に振り向かせることができれば、してやったりと思う。(岡本健裕)

本の紹介

ニューエクスプレス+ タタール語

日本語で書かれた初めてのタタール語入門書

櫻間瑞希・菱山湧人著／白水社

A5 版 190 頁 (CD 付) / 定価 3600 円 + 税

ロシア最大の少数民族、タタール人。ロシア民族に次ぐ約 530 万の人口を擁し、タタール語の話者は 428 万人。その多く

がロシア連邦内のタタールスタン共和国に暮らしています。同共和国の首都カザンを中心に話されているカザン方言に基づいた現代標準タタール語(キリル文字 33 字と 6 文字を加えた 39 文字で表記)は、ロシア語とならんでロシアの国家語とされています。

本書は、日本語で書かれた初めてのタタール語の入門書です。タタール語といっても多くの方にとってはなじみのない言語。しかし、タタール語はテュルク諸語の北西(キプチャク)語群に属し、トルコ語やウズベク語、カザフ語に近い言語とされ使用される範囲は広いのです。またフィギュアスケートのアリーナ・ザギトワ選手やカミラ・ワリエフ選手、ソ連時代の伝説のバレエダンサー、ルドルフ・ヌレエフなど芸術、スポーツで活躍したタタール人も多くいます。ロシア語話者や学習者の方も手にとってみたら世界が広がるかもしれません。タタールにちなんだコラムや詩、料理の紹介なども充実しています。(S)

本書の注文はこちらから ↓

<https://www.hakusuisha.co.jp/book/b616349.html>



本の紹介

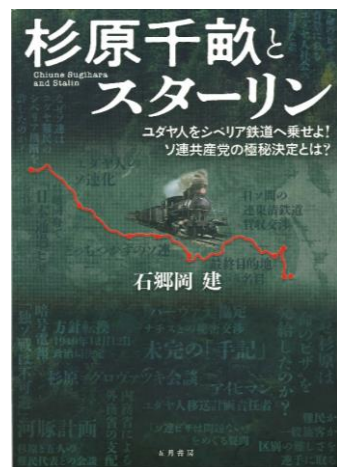
「杉原千畝とスターリン」

石郷岡建著／五月書房新社

A5 版 415 頁 / 3500 円 + 税

本書は、第一次世界大戦から第二次世界大戦にいたるドイツと東方ユダヤ人を取り巻く国際関係(米・英・欧州・独・ソ連・日本など)を踏まえて、杉原千畝の「命のビザ」の背景と歴史的事実を分析した、おそらく最もまとまった研究成果の一つであろうと思われる。

著者は、欧米におけるユダヤ人問題の入門的解説から始まって、第一次世界大戦後のドイツ・ヒトラーの反ユダヤ主義、ドイツと東方のユダヤ人たちの複雑な関係とシオニズム運動、ソ連(スターリン)とユ



ダヤ人組織との交渉、米国ユダヤ人組織による救援活動、満州とユダヤの意外な関係など、杉原の「命のビザ」の背景となる歴史的事実を、それぞれキーパーソンとなる人物の行動を追いながら生き生きと具体的に描き出す。

まえがきによれば、出発点は、「杉原から日本ビザをもらったユダヤ難民たちは、ソ連のシベリア通過のビザをどうしたのだろう？」という疑問だった。スターリン体制下のソ連で外国人が自由に歩ける場所はほとんどなかったはずで、その広い国土を西の端カウナス（リトアニア）から東の端ウラジオストクまで、数千人ものユダヤ難民たちはどうやって無事に通過できたのか。その疑問が、2014 年にロシアの古文書館で発見された文書（ソ連共産党政治局議事録）によって一つ解き明かされた。ここから著者の杉原ビザの謎に迫る知的探険が始まった。

杉原千畝は 1940 年 7 月 18 日にユダヤ難民代表ヴァルハフティクたちと会い、日本通過ビザ発給の要請を受けた。その 11 日後の 7 月 29 日から杉原は領事権限による現地判断にもとづいて通過ビザの発給を猛然と開始した。そのタイミングは、オランダ領事代理・ツヴァルテンダイクによる「キュラソー・ビザ」の発給開始（7 月 22 日）、東欧ユダヤ難民へのソ連通過ビザ発給を求めるリトアニア駐在ソ連代表の意見具申（7 月 25 日）とそれに許可を与えたソ連共産党政治局の秘密決定（7 月 27 日）の直後であった。著者は客観的な事実を提示するだけで慎重に断定を避けているが、ここには何らかの水面下の交渉あるいは当事者間の情報交換や取引があったことが強くうかがわれる。

本書には、杉原が外務省の訓令を無視して通過ビザを発給し続けることができた当時の日本政府と軍部の内部事情や、ウラジオストクにたどり着いたユダヤ難民が船で敦賀に上陸し、神戸から上海へと移動していく過程で杉原に協力した根井三郎（ウラジオストク総領事代理）や米国ユダヤ人支援組織「ジョイント」代表のベッケルマンなど、杉原ビザの「その後」についても触れられている。

「命のビザ」の背景にはまだまだ知られていない事実が多く残されているのだろう。しかし、奇跡とも思える人々の動きの重なり合いの結果として、杉原の決断が生まれ、2000 名以上のユダヤ人難民の命が救われたことは間違いない。杉原千畝の「命のビザ」を正しく歴史的事実の中に位置づけて理解するために、本書は是非多くの人に読んでいただきたい労作である。(F)

本の紹介

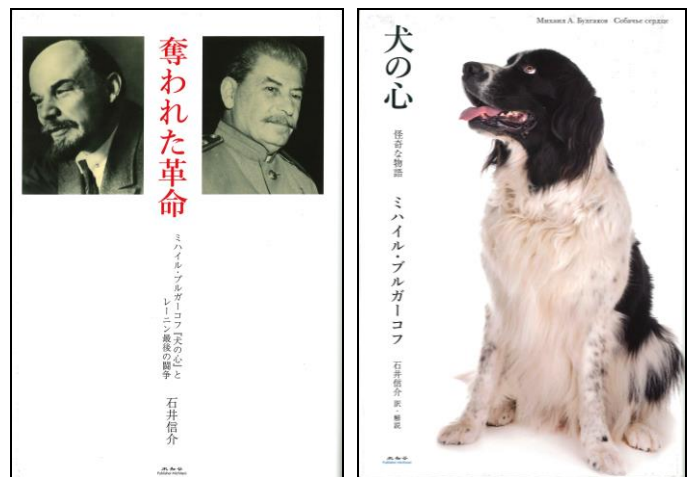
「犬の心 怪奇な物語」

ミハイル・ブルガーコフ著／石井信介訳／未知谷

四六判 272 頁／定価 2400 円＋税

「奪われた革命 ミハイル・ブルガーコフ『犬の心』とレーニン最後の闘争」

石井信介著／未知谷／四六判 245 頁／3000 円＋税



ソ連時代最大の作家の一人と言われるミハイル・ブルガーコフの「犬の心」の新訳が出た。併せて訳者である石井信介氏の手になる解説本「奪われた革命」が同時に刊行されたので紹介する。

「犬の心」は、1925 年前後のソ連・モスクワを舞台に書かれた 100 年前の SF 小説である。世界的に有名な医師・プレオブラジェンスキー教授の手によって死んだ男の脳下垂体と睾丸を移植された野良犬シャリクは、手術後の回復とともに全身の毛が抜け落ちて人間の男へと変身する。粗野で無知なもと犬シャリコフは、住宅委員会の幹部に洗脳されてにわか共産主義者に成長し、教授とその助手たちの生活を大混乱に巻き込んでいく…。

奇想天外な SF 仕立ての中編小説だが、そこには 1917 年のロシア革命から 8 年、内戦期と NEP（新経済政策）期を経て、移行期の雑然とした雰囲気をもつモスクワの街が描かれている。小説の背景を知り、1920 年代のロシア・モスクワのイメージに少しでも近づくために、97 項目 50 頁にもおよぶ詳細な訳注がつけられ、作品中に登場する音楽の解説やモスクワの地図までつけられているのが、新訳「犬の心」の特徴である。

ブルガーコフの「犬の心」はこれまで 2 度「犬の心臓」という題名で日本語訳が出されている。しかし、作品中に臓器

としての「心臓」の話は登場しない。問題にされているのは、犬から人間に改造されたシャリコフの心であり、それが「人間の心」なのか「犬の心」なのかということである。どうやら過去の日本語訳は、ブルガーコフの SF 仕立ての装飾に幻惑されたか、あるいは SF ファンを取り込む販売戦略がらみのネーミングだったようだ。訳者である石井氏の「奪われた革命」を読むと、「犬の心」こそが、ブルガーコフの真意になった題名であると思える。

石井氏は、この作品にはロシア革命（1917 年 11 月）後の初期ソ連社会が描かれており、とくにレーニン死去（1924 年 1 月）からスターリンによる権力掌握が進行していた当時のソ連共産党内の状況を鋭く風刺し、その後のソ連社会の暗い未来を予測したものだととらえ、最晩年のレーニンがスターリンをどのように見ていたかを究明している。そして、1930 年代の大テロルは、レーニンらオールド・ボリシェビキがめざした社会主義に向かう方向からスターリン派による国家資本主義強化への路線転換をはかった反革命であったと断じている。この評価の是非については今後の議論に任せるとして、現在のウクライナ戦争の背景にあるプーチン政権の政治思想は、スターリンの大ロシア民族主義と閉鎖的で強権的な政治手法をそのまま引き継いでおり、その意味でスターリン主義の徹底的な解明と批判を行うことは、きわめて今日的な課題でもある。(F)

*

*

*

以下は、石井信介氏自身が書かれた本書の梗概である。石井氏の問題意識と「奪われた革命」の内容がよくわかるので、そのまま掲載させていただきます。

「奪われた革命 ミハイル・ブルガーコフ『犬の心』とレーニン最後の闘争」の要旨

1925 年 1～3 月に執筆された『犬の心』については、社会主義を批判する風刺小説であり、ソビエト社会主義に典型的な粗野で非文化的な人間像を描いた作品であるとの評価が定着している。しかしながら、この中編小説の構造はもっと複雑である。シャリコフの第一のモデルは、作品執筆の一年前（1924 年 1 月）に死亡したレーニンの名前を冠した共産党の党勢拡大運動（レーニン記念入党キャンペーン）で共産黨員となって出世の道を歩き始めた 24 万人の労働者・農民の大部分を占めた粗暴で無知な若者たちであり、第二のモデルは、このキャンペーンを実施したスターリン共産党書記長である。

スターリンは、共産党の中核である知識人革命家（オールド・ボリシェビキ諸派：レーニン、トロツキー、ジノビエフ、カーメネフ、ブハーリンら）とは異質な、非文化的で粗野な活動家たちを代表する指導者であった。レーニンは死の一年前にスターリン書記長を解任すべきであるとの結論に到達していた。作者ブルガーコフは、犬の手術をおこなったプレオ

ブラジェンスキー教授の口からレーニンの晩年の思想である「社会主義に進むためには、共産党の幹部から労働者にいたるまでの全員が文化を身につけなければならない」との見解を繰り返させて、粗暴で無教養な新入黨員たちとそのボスであるスターリンを批判し、彼らがマルクス主義とは無縁の一律平等主義＝ポピュリズムに依拠していることを見抜き、じきにオールド・ボリシェビキ諸派に牙をむくだろうと予言した。

小説ではプレオブラジェンスキー教授がシャリコフを手術で犬に戻すことによって混乱を鎮めるが、実際の歴史では、レーニンはスターリンを排除できずに死亡した。新入黨員を手なずけて圧倒的な多数派となったスターリン派は、36～37 年の大テロルでオールド・ボリシェビキ諸派のほぼ全員を抹殺して、反革命を実現した。

『犬の心』は、ブルガーコフに固有の反社会主義的雰囲気の中で、レーニンを含む知識人の立場から新入黨員たちとスターリンを批判し、ロシア共産党とソビエト社会主義の変質を予言した稀有な政治風刺小説であるというのが、訳者の見解である。この小説の中にレーニンとスターリンの対立が反映されているとの見方は、日本はともかくとして、米国やロシアのブルガーコフ研究者の間で広まっているが、感覚的な理解にとどまっていて、詳細にこれを検討した論評はまだ存在していない。また、『犬の心』に関連して、粗暴で無教養なレーニン記念入党者を取り上げた解説はまだない。

なお、『奪われた革命』の中では、『犬の心』のメインテーマの解明をめざす中で、ブルガーコフの日記、秘密警察のエージェントによる『犬の心』朗読会のレポート、カーメネフ政治局員への出版の働きかけ、道標転換派の説明、家宅捜査のいきさつや取り調べの調書など、『犬の心』の解説に不可欠な事実を紹介し、一次資料はできる限り全訳した（日記は大部のため一部のみ翻訳）。

*

*

*

さらに、石井信介氏の旧友である原田一雄さん（静岡県在住、演出家）から読後感をいただいた。的を得たコメントとしてこれも掲載させていただきます。

『犬の心』の物語そのものも面白かったが、風刺されているソビエト社会主義社会とそこで生み出され闊歩する人間像、そしてそれらがスターリンの独裁につながっていくプロセスが『奪われた革命』の中で如実に想起されて圧倒された。ブルガーコフが提起した問題は、その後のペレストロイカ、ソビエト連邦の崩壊、プーチンの登場について考える際の基盤であると感じた。ソビエト社会に身を置きそこで学びつつ激動を見つめてきた著者石井さんだからこそこの避けて通れない問題意識が脈打っている。それにしても『犬の心』の訳注は凄い。もう一度読み直すつもりだ。

本書の購入は JIC へ（2 割引き！）→ jictokyo@jic-web.co.jp

日本のすぐ隣、ウラジオストクとロシア極東地域の開発には 100 年以上前からウクライナ移民が関わっており、いまでもウクライナにルーツを持つ人たちが多く住んでいます。極東ロシアとウクライナの意外な歴史をご紹介します。

以下、昨年 8 月の日本・ウラジオストク協会での藤本和貴夫先生の報告です。日本。ウラジオストク協会の了解を得て掲載させていただきます。(編集部)

日本・ウラジオストク協会 懇談サロン／22 年 8 月 18 日

極東ロシアとウクライナ

藤本 和貴夫 (日本・ウラジオストク協会会長、大阪大学名誉教授)

ロシア極東とウクライナの関係ですが、実はずいぶん昔に聞いた話があります。

私はソ連時代の 1987 年に初めてウラジオストクに入り、極東大学の寮に 1 週間ほどビザなしで泊まりました。その頃は、ウラジオストクは閉鎖都市で外国人立ち入り禁止だったのですが、ペレストロイカで規制が緩み始めた時期でした。極東大学の友人に「いまやリスクを負わない人間は意味がない」とか言われて(笑)、ハバロフスク空港に入り、友人の教え子のインツーリストの人間からウラジオストク行きの国内線の航空券を受け取りました。で、飛行機に乗る時に「ビザを見せろ」と言われたらアウト、諦めろ(笑)、ということだったのですが、国内線はまったくノーチェックでそのままウラジオストクに入りました。

35 年前に聞いた話

その時、ウラジオストク郊外に住む友人のおじいさんの家に遊びに行き行って聞いた話です。おじいさんは、第二次大戦前にはウクライナに住んでいて、クラーク(富農)だということで追い出されてモスクワに出た。家財道具全部持って行ったのですが、それをゴッソリ盗られて思案に暮れている時に、極東への募集の声をかけられて、ウラジオストクに来たということでした。

おじいさんは相当広い畑を持っていました。当時ロシア人が所有できる土地は限られていたのですが、それに比べると考えられない広さの畑を持っていたので、すごいなと思った記憶があります。1937 年に沿海地方に住んでいた朝鮮民族がスターリンの命令で強制的に中央アジアに移住させられていますから、おそらくそれで空いた土地を耕すために入植者を募集していたのに行き当たったのではないかと思います。

それともう一つ、ウラジオストク近郊の昔の地図を見たら、随分、ウクライナ系の地名がありました。その友人が学生の頃に、ソ連時代の学生は夏休みに援農に行かされるのですが、援農先で何語をしゃべっているのか全くわからない

人たちに会ったという話も聞きました。それがウクライナ語だったのかどうかはわかりませんが、都市部ではなく農村部にはウクライナ系の人たちが結構住んでいたんだなという記憶がありました。

それで、今回のテーマをいただいて、少し調べてみました。



オデッサーウラジオストク間の定期航路

ロシア極東の歴史を見ると、1858 年にロシアと中国(清国)のあいだで愛琿条約が結ばれます。この条約でロシアはアムール川の左岸を獲得します。それから今度は 1860 年の北京条約でウスリー川以東、ウスリー川はハンカ湖から北に流れてアムール川と合流しているのですが、その川の東側から太平洋岸までがロシア領になります。というわけで、1860 年にロシアはウラジオストクを含む極東地域東南部を獲得して、その開発に着手するわけです。

ロシア帝国政府は極東の開発のために開拓民を送り込もうと考えるのですが、そのきっかけになるのはスエズ運河の開通(1869 年)と、オデッサーウラジオストク間のロシア「義勇艦隊」による定期航路開設(1880 年)です。

ロシアでは 1861 年に農奴解放が行われます。これ以降、それまで土地に縛り付けられていた農民は自由に農村共同体を離れられるようになったわけですが、実際にはそう簡単で

はなかった。農奴解放令では、農民は自分が耕している土地を（お金を払って）地主から買い戻すことになっていました。すぐに自由な農民が生まれたわけではありませんが、一応農民が移動できる条件はこれでできていました。

一方、露土戦争（1877-78 年）でロシアはトルコに勝利しますが、その過程で民間資金を集めて 1878 年に「義勇艦隊」が作られます。これは政府がコントロールする高速武装商船で、戦争になれば軍艦として使用し、平時には商船として物資の輸送に使うというものです。1880 年にこの「義勇艦隊」を使ったオデッサと極東のウラジオストクを結ぶ定期航路が開設されました。

1883 年にウクライナから最初の入植者を乗せた船が入る

この「義勇艦隊」が、開設したばかりのオデッサーウラジオストク航路を使って、ロシア極東の新しい領土に開拓農民を運ぶことになります。ロシア政府は極東地域への農民入植者を募集し、入植する家族には、1 家族当たり 100 デシャチーナ（109 ヘクタール）の土地を 20 年間無償貸与するという優遇策を取ります。1883 年の 3 月に最初の農業移民を乗せた「ロシア号」と「ペテルブルグ号」の 2 隻がウラジオストクに入りました。1504 人の農民が乗っていました。これが「義勇艦隊」による航路を使った植民の始まりであります。

他方、ウラジオストクからオデッサへの帰路には中国の茶が運ばれています。従来の陸路によるキャフタを経由した貿易と異なり、大量の茶がロシアに運ばれ、ロシアはイギリスに次ぐ紅茶の消費国となります。

チェルニーゴフ県、ポルタワ県からの移民が多かった

では、ロシア極東に向かった農民はどこから集まって来たか。それは、当時、「小ロシア」と呼ばれていた現在のウクライナのチェルニーゴフ県が圧倒的に多いのです。当初、チェルニーゴフ県の農民が沿海地域の南部に 9 つの村を作ったと言われています。なぜチェルニーゴフ県かというと、ウクライナの中央をドニエプル川が北から南に流れ黒海に注いでいます。その河口近くにある港湾都市がオデッサです。チェルニーゴフ県、ポルタワ県、キエフ県といった地域はドニエプル川でオデッサとつながっているのです。しかも、当時のチェルニーゴフ県の農民の分与地は平均 8 デシャチーナといわれ、100 デシャチーナとなれば非常に良い条件だっただろうと思います。

ウクライナでは土地共同体の力が弱かった

もう一つ、ウクライナから多くの入植者が出たのは、土地共同体の力が相対的に弱かったということもあります。中央ロシアは農村共同体の力が強くて、農奴解放後も簡単には共同体から離れられなかった。農民が土地を売って他所へ行くということはなかなか難しかったのですが、ウクライナでは



比較的容易だったようです。もちろん中央ロシア部からも入植者が極東へも来ていますが、それはもう少し後のことで（中央ロシアではストルイピン改革（1906 年）の頃まで共同体を離れるのは困難だった）、最初はウクライナから農民が出やすかったということです。

統計が残っています。1883 年から 1892 年までの 10 年間で、沿海地域への入植者の 74% がチェルニーゴフ県、残りがポルタワ県とハリコフ県の農民でした。これらはドニエプル川左岸（東側）の地域です。ウクライナはドニエプル川の左岸（東側）と右岸（西側）で住民意識や社会風土が違って、東側はロシア語話者が多い。現在のウクライナ戦争もドニエプル川をはさんだ戦場が問題となっていますが、当時、極東にやって来たウクライナ農民の大半は左岸（東側）からの農民でした。

古参住民と新規移民

19 世紀末、1897 年にロシア帝国で第 1 回全国人口調査が行われ、県、州別の母語話者の人数がわかります。沿海州ではロシア語話者 80,173 人、ウクライナ語 33,526 人、ベロルシア語 274 人、ポーランド語 3,199 人、ユダヤ語 1,571 人です。ついでに言えば、アジア系では、中国語 30,704 人、朝鮮語 24,306 人、日本語 2,094 人でとなっています。ウクライナ語話者とロシア語話者の割合は 3 対 1 ほどです。

極東地域への農業移民は 20 世紀に入っても続きますが、移住者が増えると農業に適した土地が少なくなってくる。ロシア政府は 1900 年に新たな移住者への土地の割り当てを 1 人 15 デシャチーナに削減しました。そのため、1900 年以前に来た移民は古参住民、1900 年以降に来た人たちは新規移民と称され、経済的な格差が生まれます。

日露戦争直前の 1903 年にシベリア鉄道がバイカル湖南端部を残して開通しました（バイカル湖の南端は水上航路で連絡）。その結果、中央ロシアからの農民はシベリア鉄道を使って陸路を、ウクライナの農民はオデッサを経由して航路でやって来ます。当然、船でやってくる方が容易で多かった。1907 年から 1917 年半ばまでの 10 年間に沿海地域（この沿海地域

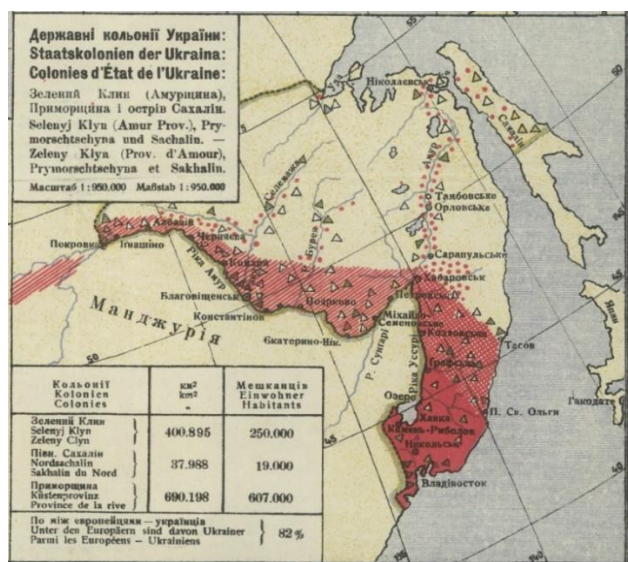
というのは現在の沿海地方よりも広い地域を指す) に入った移民は 167,547 人でした。

1906 年のストルイピンの農業改革でロシア諸県の農民の土地の私有と共同体離脱が認められた後になっても、ウクライナからの移民が 76%以上を占めていました。その内訳はチェルニーゴフ県からが 3 分の 1、キエフ県からが 5 分の 1、ポルタワ県からが 10 分の 1 だったとされています。

※「極東におけるウクライナ人」(ロシア語版ウィキペディア：*Вольные Дальневосточная Украина. Украинская деревня начала XX века.*)

沿海地域南部とアムール地域(ゼーヤ川流域)に多く居住

ウクライナからの農業移民は沿海地域南部とアムール地域(北からアムール川に流入するゼーヤ川流域)に多く居住しています。極東の北に行く수록寒くて住めないのですが、沿海地域とゼーヤ川流域は比較的温暖で、自然環境がチェルニーゴフ県やポルタワ県と似ていたため、それが極東に定着する原因になったと思われます(入植地図)。



ある民族学者はこう書いています。「20 世紀初めのウラジオストクはウクライナの村に囲まれていた。目撃者の証言によれば、市民はこの地方の全ての農村住民を「ホホール」と呼ぶほかなかった」(「ホホール」はウクライナ人の蔑称)。

また、こうも書かれています「20 世紀の初めの沿海地域は、状況がウクライナそのものと似ていた。ウクライナ農村に囲まれたロシア語を話す多民族都市であった。その点でウラジオストクはキエフと大きくは異ならなかった」。

ウクライナの首都キエフも、キエフ市内はロシア人が多く、周辺の村や町にウクライナ人がたくさん住んでいます。ウラジオストクも同じで、ウラジオストク市内はロシア人が多いが、周辺の農村はウクライナ人の村がある。そういう状況だったという記録がいろいろ残っています。

ウクライナ系の地名もたくさんあった

またこの地域の地名には、キエフカ川、キエフカ村、ポルタフカ村、チェルニーゴフカ小村、チュグエフカ小村、スラヴァンカ小村、ホロリ小村など、移住前に住んでいたウクライナの地名を想起させる村や川の名前が見られます。最近の地図で確認すると、タブリチャンカ、キエフカ、キエネフカなどの地名が残っていますが、ロシア革命と第二次大戦のあとロシアの地名はかなり変えられていますから、古い地図でないといわれない場合があります。ソ連崩壊後に元に戻された地名もありますが。

革命期のウクライナ民族組織

このような状況の中で、1917 年にロシア革命が起こるのですが、この時、極東のウクライナ人はやはり独特の動きをしています。ロシア革命史ではほとんど触れてこなかったのですが、ウラジオストクとその近郊に「ウラジオストク・ウクライナ・グロマーダ(共同体)」が組織されています。二月革命後、キエフのウクライナ中央ラーダが臨時政府に対してウクライナの自治を要求したのに対応して、6 月にニコリスク=ウスリスキー(現ウスリースク)で極東社会活動家全ウクライナ大会が開かれ、各地にウクライナ文化センターを設立することなどを決議しています。しかし、十月革命でソビエト政権が土地の私有化を廃止して農民委員会へ土地の引き渡しを要求すると、極東の農民は反対します。中央ロシアと異なり、極東の農民の多くは土地を持つ自営農であったからです。

しかし、1918 年から 1922 年まで、最初は日米を中心に、その後は日本軍単独でのシベリア出兵によって極東は外国の占領下に入りました。1922 年 10 月の日本のシベリア撤退後は、12 月に、ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、ザカフカスの 4 つのソビエト社会主義共和国が同盟を組み、ソ連邦を結成します。極東でのウクライナ民族運動の積極的な活動家は逮捕されてしまいます。もちろんウクライナ系の活動家でソビエト政権に参画した人も多数います。ウクライナ民族組織としてはソ連邦に合流したわけです。

ウラジオ管区の 3 分の 1 がウクライナ人 (1926 年調査)

ソ連邦になってからは、1926 年の人口調査があります。極東地域にウクライナ人はどれくらいいたか。

極東地方のウクライナ人(1926 年人口調査)

	人口総数	ウクライナ人	%
極東地方全体	1,727,574	315,203	18.2
アムール管区	386,698	100,500	26.0
ウラジオストク管区	453,419	148,768	32.8
ハバロフスク管区	176,091	49,430	28.1

Демоскоп Weekly - Приложение. Справочник статистических

показателей. demoscope.ru. Дата обращения: 26 марта

2017. Архивировано 14 мая 2014 года.

表に見るように、極東人口全体の 18.2%、アムール管区の 26.0%、ウラジオストク管区の 32.8%、ハバロフスク管区の 28.1%をウクライナ人が占めています。ウラジオストク近辺は人口の 3 分の 1 がウクライナ人でした。

ただし、人口調査での民族の決め方というのは、19 世紀の帝政時代では言葉でした。その人の母語で民族を決めていましたが、これはヨーロッパでの基準に合わせたものでした。ソ連時代には本人の意識、自分でロシア人かウクライナ人か決めるようになりますので、本人の選択によって民族が変わってきます。しかし、この段階ではウラジオストク近辺の人口の 3 分の 1 くらいがウクライナ人と考えていたということです、やっぱり多かったと言えます。

今日まで続く極東地方とウクライナの関係

下の表は、その後の人口調査統計です。1959 年から 2010 年までの調査で、各地のウクライナ人の総数は傾向的に減っています。これは、世代が移っていくと、ウクライナ語もしゃべらなくなるし、当然意識も変わっていくということですが、1959 年はまだ結構多いですね。ハバロフスクで 83,000 人、沿海地方は 182,000 人でした。ソ連崩壊後に顕著な変化が起こっています。1989 年が崩壊直前で人口もほぼピークです。それがソ連崩壊後はどんどん減って、2010 年には沿海地方で 49,953 人となっています。ソ連崩壊の混乱からウクライナに移住した人も多かったと思われませんが、ウクライナと極東地方の関係は続いていたと言われます。

ソ連崩壊後、ソ連時代の各民族共和国は独立して、「近い外国」と言われるようになりました。ウクライナも「近い外国」です。これは沿海地方だけの調査ですが、「近い外国」からの人口流入と流出の統計表があります。

ウクライナからの流入と流出を見ると、2005 年に沿海地方からウクライナに出て行った人は 142 人、ウクライナから入ってきた人は 158 人です。それが年を追うごとに流入が増えているのですね。2009 年には 419 人が流入しています。流出は逆に減って、2009 年は 109 人です。2010 年以降の変化はこの表では分かりませんが、しかし、沿海地方に住んでいる人々がウクライナと今もいろいろな関係を持っていることは間違いのないと思います。

極東地方におけるウクライナ人口調査結果(1959－2010 年)

	1959 年	%	1979 年	%	1989 年	%	2002 年	%	2010 年	%
沿海地方	182,004	13.18	163,116	8.25	185,091	8.20	94,058	4.58	49,953	2.76
ハバロフスク地方	83,737	8.55	77,787	5.68	96,665	6.05	48,622	3.39	26,803	2.08
カムチャツカ地方	14,852	6.37	30,439	7.90	43,014	9.11	20,870	6.01	11,488	3.91
アムール州	56,266	7.84	57,669	6.16	70,759	6.74	31,475	3.49	16,636	2.02
サハリン州	48,073	7.40	40,600	6.13	46,216	6.51	21,831	4.02	21,136	2.56

Демоскоп Weekly - Приложение. Справочник статистических показателей. demoscope.ru. Дата обращения:

26 марта 2017. Архивировано 18 ноября 2015 года.

「近い外国」からの人口流入と流出(沿海地方統計 2010)

	2005	2006	2007	2008	2009
流入総計	742	893	2174	2871	2083
ウクライナ	158	239	656	815	419
ウズベキスタン	162	200	656	815	419
カザフスタン	175	105	143	176	126
アルメニア	37	93	202	512	395
流出総計	289	327	378	363	304
ウクライナ	142	181	160	166	109
ウズベキスタン	5	10	14	12	1
カザフスタン	31	42	58	43	40
ベラルーシ	84	73	93	64	70

Приморский край: социально-экономические показатели.

Статистический ежегодник. Владивосток, 2010. С.58-59.

* * *

ここまで見てきたように、ロシア極東とウクライナの間には歴史的に非常に深いつながりがあるということがわかります。世代を経るごとに民族の融合も進んでいますので、自らをウクライナ人と意識しているかどうかは別にして、ウクライナ系の人々がロシア極東に多数住んでいることは事実です。そういう意味で、極東はウクライナとの長い歴史があって、おそらく親族関係を含む様々な関係が現在も続いているであろうと思われます。

今回は帝政ロシア時代のウクライナからの極東移民の話を中心にしましたが、ソ連時代にもいくつかの移民の波がありました。一つは、冒頭のおじいさんの話です。1930 年代後半から 40 年代にかけて、多くの人々がロシア中央部やウクライナから極東に強制移住させられています。

もう一つは、戦後 1950 年代以降のシベリア極東開発です。「社会主義建設」ということで、モスクワやサンクトペテルブルグなどの大学で優秀な成績をおさめた、さまざまな民族の若者が未来を拓くためにシベリア極東に派遣されています。

ロシア極東とウクライナとの固い歴史的な結びつきが、現在のウクライナ戦争を一刻も早く終わらせる上でどのような役割を果たしうるのか、真剣に考えなければならないと思っています。

日ロ交流情報

創価大学で、第 30 回目のロシア語スピーチコンテスト(12 月 18 日)

創価大学の第 30 回ロシア語スピーチコンテストが、2019 年以來 2 年ぶりに開催されました。新型コロナの影響は今年も残り、会場は無観客での開催となったものの、YouTube でのオンライン配信が行われ、コンテストはハイブリット形式で行われました。



2 年のブランクはあったものの、エレメンタリー部門、スタンダード・ビデオ部門、スタンダード・対面部門に、創価大学、中央大学、ロシア極東連邦大学函館校の学生や、関東国際高校、早稲田大学高等学院、都立北園高等学校など高校生の参加も目立ち、総勢 20 名近くの出場者が登壇しました。

スタンダード・対面部門の優勝者は加藤岡アルセイニさんで、賞品として JIC からペテルブルグの語学学校デルジャービン・インスティテュートの「2 週間オンライン個人レッスン」が贈呈されました。

審査委員長の佐々木精治・創価大学教授が挨拶で、「コロナにより 2 年間、対面授業ができず学生たちは授業を続けてくれるだろうかと大変はがゆい思いをした。ウクライナ侵攻の後、戦争が終わってもロシアには大変な時代が待っている。それでもロシア語に罪はない。ロシア語を学習している人こそできることがある。どうかロシア語を続けてください」と語りかけられていたことが強く印象に残りました。

かまくら国際交流フェス(11 月 6 日) 湘南ロシア倶楽部がバザール出店

11 月 6 日、鎌倉大仏(高德院)の境内で、「かまくら国際交流フェスティバル 2022」が開催され、湘南ロシア倶楽部(渡辺雅司会長)が協力団体とともにバザールに出店しました。当日は、ロシア料理レストラン「ペーチカ」製造のピロシキ、JIC が持ち込んだ「ソバの実」や T シャツ、日本ユーラシア協会のマトリョーシカ、蜂蜜などが並び、とくにピロシキは昼過ぎに完売するなど、好評でした。

また、湘南ロシア倶楽部は 12 月 10 日に総会を行い、ウクライナ戦争やコロナなど困難な状況の中でも日ロ交流を続けていこうと、23 年は日本国内のロシアゆかりの地を訪ねるツアーを企画するなどの活動計画を確認しました。

大阪日ロ協会が講演会(11 月 26 日) 「ウクライナ戦争とゴルバチョフ氏」

11 月 26 日、大阪日ロ協会(藤本和貴夫理事長)の講演会が、大阪市北区の PLP 会館にてオンライン併用で開催されました。「ウクライナ戦争、ゴルバチョフ氏の視座にはどう映っていたか」と題して、朝日新聞編集委員で元モスクワ支局長の副島英樹氏が講演。副島氏はゴルバチョフ氏の回想録と自伝を翻訳出版し、また直接インタビューもしておられます。プーチン政権の誕生以来その動向を現地 2 回の特派員生活を通じて観察し取材してきた豊富な経験を踏まえて、ゴルバチョフ氏とプーチン大統領の政治思想の違いを分析し、ウクライナ戦争の見方と今後の国際政治・軍備管理のあり方について話をされました(2 頁に講演録を掲載)。

11 月 7 日、ロシア大使館にて 映画「ゾルゲ」の特別上映会



第二次大戦前の日本を舞台に活躍したソ連のスパイ、リヒャルト・ゾルゲの諜報活動を描いたテレビドラマ(ロシア第一 TV/全 12 話)が、映画になってシリーズ上映されます。その宣伝を兼ねた特別上映会が 11 月 7 日、ゾルゲの命日(ゾルゲは 1944 年 11 月 7 日に処刑された)に東京のロシア大使館で開催されました。

映画「スパイを愛した女たち リヒャルト・ゾルゲ」
2 月 25 日から、新宿 K シネマにて劇場公開

劇場公開版は、2 話 1 組として劇場にて連日、朝一回連続上映(2 週間)の予定。

前売り券発売中! 3 枚綴り 3300 円 当日 1500 円

配給:平成プロジェクト

公式ホームページ URL <https://spyzorge.com/>



モイセーエフバレエ団の訪日公演 東京、横浜、埼玉で開催(10 月)

モイセーエフバレエ団 (正式名称 ; イーゴリ・モイセーエフ記念国立アカデミー民族舞踊アンサンブル) の訪日公演が、22 年 10 月 17 日～21 日、東京・横浜・埼玉で行われました。

これは 2020 年に「25 年ぶりの訪日公演」としてロシア文化フェスティバル日本組織委員会の招聘で予定されていたものですが、新型コロナで 2 年間の延期を余儀なくされ、昨年ようやく 27 年ぶりの来日を実現したものです。

公演プログラムは、ロシアの踊り「夏」に始まって、カルムイク人の踊り、ベラルーシ舞踊、モルドヴァの舞踊組曲など全 14 曲。さすがにその演技パフォーマンスは圧巻で、舞台上で繰り広げられる超絶技巧の数々に、満席の会場からは何回も大きな拍手が繰り返されました。

第 3 回ロシア文学読書感想文コンクール 「私のトルストイ」12 月 11 日に表彰式

本紙でも紹介した第 3 回ロシア文学読書感想文「私のトルストイ」(主催 ; NPO 法人ヘラルドの会) の入賞者が決まり、12 月 11 日に東京の昭和大学にて表彰式が行われました。

高校・大学生の部の入賞者は、穴井海人さん (明星学園高校)、力諒子さん (創価大学)、賈翎萱さん (昭和女子大学)、坂内美早紀さん (跡見学園女子大学)、村川羽叶さん (跡見学園女子大学) の 5 名で、さらに手塚智哉さん (札幌大学) が奨励賞に選ばれました。

表彰式のあとには、ミハイル・カンディンスキーさん (ピアノ) と澤田智恵さん (ヴァイオリン) によるミニ・コンサートが行われました。

*コンクールの詳細については、ヘラルドの会のブログをご参照ください。

<http://heraldyokohama.blog.jp/>

<発売中!> 小我野明子さんの本 ロシアのチョコレート包み紙 ～ソ連時代のかわいいデザイン～

小我野明子さんの本が 1 月に出版されました。
青幻舎刊、A5 版 160 頁、定価 : 2200 円 + 税

「ソ連時代につくられた多くのチョコレートの包み紙が、今日も生き残り、使用されています。そして、そのほとんどが「ソ連スタイル」パッケージの名品となりました。

ソ連時代の産業グラフィックは、これまで完全な意味では、芸術として認められてきませんでした。包み紙はほとんどの場合、一度きりの使い捨てとしてゴミになりました。しかし、コレクターはチョコレートラベルの芸術的、文化的価値を理解していたのです。…」(本書より)

注文は、青幻舎へ → info@seigensha.com

◆◆編集後記◆◆

▼ウクライナ戦争が始まってから 11 か月が経とうとしています。東部と南部ではいまだ激しい戦闘が繰り返されています。ロシア軍の大規模なインフラ攻撃がウクライナの人々の生活を苦しめています。▼昨年 8 月末に亡くなったゴルバチョフ・元ソ連大統領はこの戦争をどのように見ていたのか。本号収録の朝日新聞編集委員・元モスクワ支局長、副島英樹氏の講演録 (主催 ; 大阪日ロ協会) では、東西冷戦終結後の核軍備管理・欧州安全保障交渉の失敗が今回のウクライナ戦争の遠因となったことが鋭く指摘されています。冷戦終結と東西ドイツの統一を平和裏に実現したゴルバチョフ・レーガン合意の英知に再び学ぶ必要があると思います。▼本号では最近話題の本をいくつかまとめて紹介しました。短い文字や写真で印象を効果的に伝える SNS もいいですが、知識を広げ、物事を深く理解するためには読書と思索が大事です。是非、気になる本を手にとってみてください。▼戦争とコロナ、まだまだ困難な日々が続きますが、JIC は元気に情報発信を続けます。本年もよろしくお願いいたします。(F)